

研究紀要

第3号 令和4年度

[論文]

三河の豪商神谷長四郎と刈谷藩 …………… 村瀬 典章 1

[資料紹介]

本刈谷貝塚出土の装飾品について

—愛知県指定史跡本刈谷貝塚確認調査報告・補遺— …… 野村 啓輔 17(42)

本刈谷貝塚出土骨角器および関連資料について …… 川添 和暁 30(29)

[研究ノート]

西石根第7号窯 (IG-67) の須恵器、灰釉陶器

—愛知県陶磁美術館所蔵の資料から— …………… 河野あすか 47(12)

[報告]

価値ある学びの場となる博学連携のあり方について

…………… 河村 智美 54(5)

本刈谷貝塚出土の貝類 …………… 新美 倫子・鵜飼 堅証 58(1)

三河の豪商神谷長四郎と刈谷藩

村瀬典章

はじめに

泉田村は三河国碧海郡の西に位置し、境川を挟んで対岸は尾張領になる。境川は泉田村よりさらに北部に流れ、逢妻川は泉田村を挟むようにして北東に流れを変えている。この両川を利用する形で、江戸時代の泉田村は、河岸が設けられ、舟運が発達して物資の輸送が盛んに行われた。その繁栄ぶりは小江戸とも呼ばれたとされ、「ざいごなれども 泉田小江戸 前の小川へ 舟が着く」と唄われるほどであった。

この泉田村の繁栄は神谷長四郎によるものが非常に大きい。しかし、その実際の活動内容などは不明のままである。

本稿では、神谷長四郎の商売上の活動、御用達人としての刈谷藩の關係、その後の刈谷藩士としての関わりとともに、神谷長四郎の果たした役割とそのあとの鈴木文助・角文の商売上の關係を説明することを目的とする。

一 神谷長四郎の出自

神谷長四郎家について系図に示すと図のとおりである。香典帳・年忌帳等から作成した。一番古くは長四郎（法名休和）を確認することができる。同人は、年忌帳によると寛文十三年（一六七三）七

月十四日没とある。それ以前は史料のうえで確認することができないが、おそらくさらに遡ることも推測できる。本稿では確認できる休和を初代として論考を進めていく。できるだけ何代長四郎として表記するが、適宜諱と法名を併せていく。

一代神谷長四郎泰蔵が嘉永二年（一八四九）六月に先祖のことを書いた「口上書」によると、「私家中古先祖長四郎泉田村住居以来養父真十郎まで八代之間無移転家統相任来り候」と書き、八代のところの横に朱書きで「数代」と書き込んでいる。同史料は下書であるが、何代かは不明になっている。

初代長四郎以前について、次の史料によって推測してみる。

源氏桃井

永祿迄水野右衛門太夫忠政幕下

一小垣江 神谷与兵衛

一東端 神谷与次郎

一桑名 神谷新十郎

神谷与次郎

神谷新七郎

一別家江戸本所萩本 神谷三右衛門

神谷又助

神谷又助

- 一 水野和泉守内 神谷孫兵衛
- 一 渡刈鹿島神主 神谷新兵衛^③

右の史料が鈴木家（後述するが、鈴木家が神谷長四郎家の商売を引き継いでいたり、神谷家から鈴木家に養子に入っていたり、明治期に入ってから一〇代長四郎の娘が鈴木文助と結婚していることなど、縁戚関係があることから、神谷家の史料が鈴木家の史料に混在している）に残っているという事はこれは神谷家の先祖のことを示したものと思われる。このことを前提にし

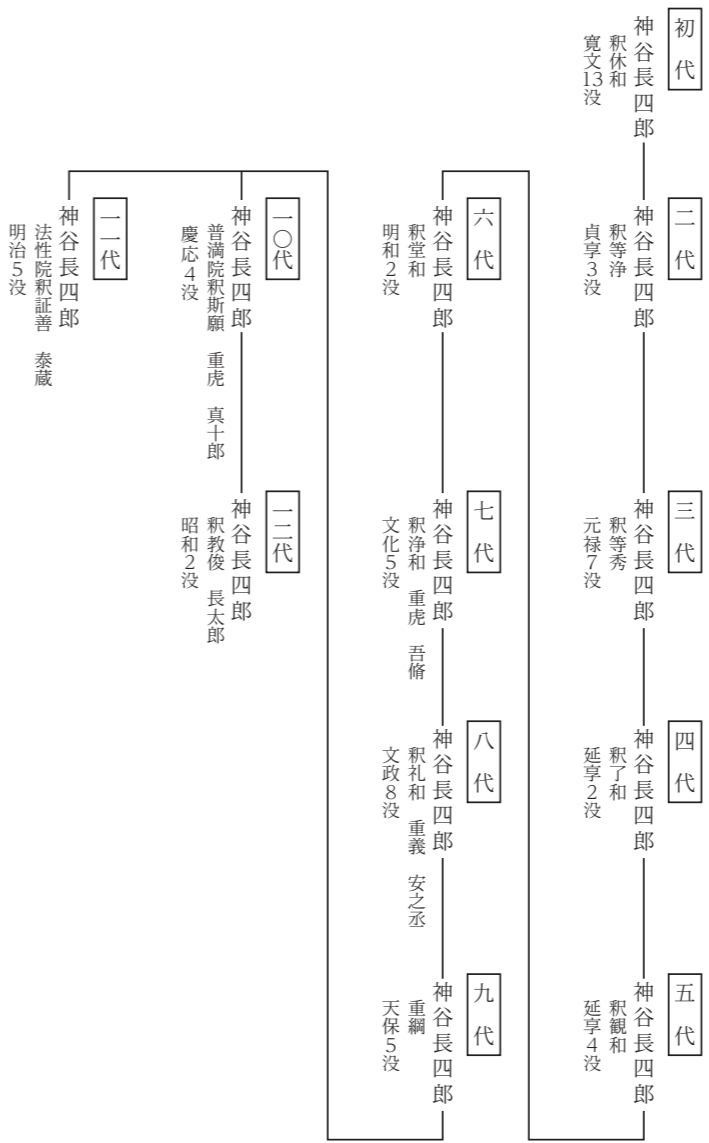


図 神谷長四郎家系図

て、戦国期の神谷家について検討していく。
史料によると神谷家は、最初に永禄期（一五五八～一五七〇）まで水野忠政の家臣であったとされる。しかし、水野忠政は天文十二年（一五四三）に没しているので、永禄期まで水野忠政の家臣であったことは矛盾する。おそらく当初水野忠政の家臣であり、忠政没後はその跡を継いだ信元・忠重に仕えたと考えてよいだろう。
「三河国二葉松」に「小垣江古屋敷 神谷与七郎」「東端古城 在二ヶ所内一ヶ所屋敷永井右近直勝 神谷与七郎^④」、「参河国古今城壘地理誌」には、「小垣江村 神谷与四郎 与八郎或ハ与次郎領ス」「同所（東端村）屋敷 神谷与七郎^⑤」「参河堤」には「△小垣江村古城 神谷与八郎 長坂千次郎」「同村（東端村）古屋敷 神谷与七郎 同藤左衛門 同源六^⑥」、「参河志」には「小垣江村 高千七拾石八斗式升 同知名箋に云御垣江古屋敷あり 古伝記に云 神谷与次郎 同与八郎」「東端村 古屋敷 神谷与七郎 同藤左衛門 同源六^⑦」とあり、混在しているもの神谷与次郎・神谷与七郎・神谷与八郎等神谷姓の名がある。これによると、水野忠政の家臣後、または家臣として小垣江城（屋敷）主となっていたか、忠政から屋敷を与えられていた。天文十四年三月十五日、水野守忠が真宗高田派の桑子明眼寺に小垣江の蔵屋敷を「寺中」として

「不入」^⑧に寄進していることから水野家と小垣江の関係をうかがわせる。

「寛政重修諸家譜」によると、神谷吉久系の神谷姓の説明書に「今の呈譜に、神谷石見守高明神谷与七郎清銳が呈譜には高朝に作るが子孫なりといふ」とあり、神谷吉久は「水野下野守信元に仕えて家老たり。天正十二年六月二十七日三河国刈屋にをいて死す。年七十七、法名全忠^⑨」とあり、その子長直は「水野和泉守忠重につかへ、家老の列たり」、またその子三正は「水野忠重につかへ」とあり、この神谷家系図に続くかどうかは不明であるが、刈谷水野に仕えていた重臣神谷家があったことは確かである。

神谷姓の祖とする神谷高朝については次の史料に現されている。

神谷石見守高朝 宇津宮末流応永年中の人なり
三州碧海郡上野十三村の内阿弥陀堂村に住ス、其子孫三州に多し、宗定村に神谷弥五郎宗弘とかや云ひし人の居城とて旧墟も侍る、彼ノ家の紋ハ上り藤の内に上ケ羽蝶と云云、神君の御家人に神谷与治右衛門某といへるハ弥五助の孫なり、千五百石を領す也、其子与七郎、其子与七郎実ハ朝比奈太郎兵衛子承応ノ比御書院にて二千石を領す^⑩

右のように書かれている。しかし、寛政重修諸家譜にある神谷家の家紋と現在神谷長四郎家に伝わる家紋とは異なり、関連性について今後さらなる検討が必要である。

このほか、「水野記」^⑪によると、水野家の家臣の由緒書として、神谷九郎兵衛は水野勝成の代、神谷六右衛門は水野勝成の代、神谷

信五左衛門は水野忠重の代に召し出されているとあり、三人の神谷姓はいずれも忠政よりも後の代によって家臣となっていたことから、直接的な関係はないであろう。ただし、この由緒書は水野家が郡山のと、福山に転封したあとの時点での家臣であるので、系図に書かれている神谷家が水野家の転封以前に家臣を離脱していれば掲載されていないことから、その関係性をうかがい知ることはできない。

二 商人としての神谷長四郎

神谷長四郎家は、屋号は岡長といい、泉田村での商人としての地位を確立したが、その商売内容については、個々の商売の様子を示す史料は残されていない。唯一商売内容を示すものが、元禄十一年（一六九八）から寛保三年（一七四三）までの勘定が書かれた「勘定帳」^⑫である。この史料を基にして神谷家の商売の様子を検討してみる。

同史料は表紙に次のように書かれている。

神谷長四郎

四十九才夏

御先祖之毎年金銭出入仕揚御帳面故太切仕置申候、必ほぐ二被

成まじく事

慶応元年

寅七月五日改之

史料にある神谷長四郎は一〇代長四郎で名を真十郎といったが、真十郎は天保十三年（一八四二）三月二十四日に致仕し、当時男子がいなかったので、弟である泰蔵に一一代長四郎を継がせている。慶応二年（一八六六）の時点では致仕して泰蔵に長四郎を譲っているため、なぜ神谷長四郎の名を使っているのか疑問が残るが、致仕してから先祖の商売の状況を残して置くために、それまで残っていた勘定帳を書き留めたとしている。現在史料に書き写された元の勘定帳は残されていないこともあり、その際に処分したのかもしれない。また、当史料は、元禄十一年から寛保三年までしか書かれていないが、元禄十一年以前も商売を行っており、また寛保三年以降も行っていたことから、この間以外のものが書かれていないのは何か意図があったのかは明らかでない。

商人として神谷長四郎の名を史料のうえで確認することができるのは、享保十六年（一七三一）になる。この年十二月九日に、刈谷町太田忠右衛門・大和屋庄左衛門・大岡伝右衛門・高浜村平右衛門・善兵衛と並んで神谷長四郎は刈谷藩より一汁三菜の料理を受けている。刈谷町の太田忠右衛門・大岡伝右衛門は刈谷町を代表する酒造家の大商人である。また、寛保三年五月二十二日には、御用金出精に付き料理を受け、麻上下も下されている。これは大商人として多額の御用金を刈谷藩に差し出したことによる御礼である。延享四年（一七四七）には刈谷藩主三浦義理が西尾藩に転封することになり、それまでの御礼として刈谷町太田忠右衛門・大岡伝右衛門・樋口庄左衛門・本田源助・泉田村神谷長四郎・高浜村石原儀兵衛・石原茂兵衛に対し袴地二具宛が渡されている。これには「右只今迄御用向致出精候付被下候旨御用人申渡之」とあるように御用向に出精した

享和二年戌十月今同郡泉田村神谷屋長四郎へ入

又文政九戌年六月譲り請

御鑑札高

一株高三百石

内藤丹波守領分

加茂郡越戸村

吉橋屋伊助¹⁶⁾

これによると、六代神谷長四郎は享和二年（一八〇二）十月に井ヶ谷村近藤新三郎から三百石の酒造株を買い、それを文政九年（一八二六）に越戸村吉橋屋伊助に売り渡したとある。また、同史料には、次のような記載がある。

以前泉田村神谷長四郎株也

天保五午年譲り請

一株高七百五拾石

本多篤三郎知行

加茂郡足助村

深見屋惣七

天保十二丑十一月碧海郡今川村矢田屋庄右衛門今深見屋惣

七江入¹⁷⁾

これによると、酒造株七五〇石を一〇代神谷長四郎が所持しており、天保五年に今川村矢田屋庄右衛門へ渡り、それを同十二年に加茂郡足助村の深見屋惣七へさらに譲り渡されたとある。つまり、天保五年まで神谷長四郎が酒造株七五〇石を造酒していたことになる。

こと、つまり御用金を出していたことに対する刈谷藩からのお礼である。

① 酒造

まず、神谷長四郎家の商売は何が中心であったのかを考えると、酒造があげられる。

享保二十年三河国碧海郡の江戸積酒造家には、刈谷町の大岡伝右衛門・鴻池又左衛門・大和屋甚兵衛とならんで、神谷長四郎の名がある。つまり、享保二十年には四代神谷長四郎は酒造を行っていたことになる。

勘定帳によると、一番古い元禄十一年の中に「さけ取かへ入分」として金二九両一分一〇七文、さらに同十二年には「酒かた米金卯としの分」として金二九七両三分八二六文、「卯ノ暮酒入り二有」として金四一両三分三二五文が書かれている。このあとも酒に関する記載が続く。

元禄十年の酒造業者として、刈谷町鴻池又兵衛・庄右衛門・平蔵・太左衛門・大岡伝右衛門・大岡新六、元刈谷村神谷太郎左衛門、今川茶屋村惣七が挙げられているが、これには神谷長四郎の名前はない。このことから、神谷長四郎の酒造は元禄十年以降と考えられるが、元禄十一年には酒造に関する記述が勘定帳にあることから、ほぼこのころから始まったとしてよいだろう。つまり、神谷長四郎の酒造は刈谷藩領でも早い段階で始められたと考えられる。

天保七年の「参州下り酒造株家別入替改帳」には、次のようにある。

以前碧海郡井ヶ谷村近藤屋新三郎株

これを裏付ける資料として、天保三年の「村方明細帳」があり、これには次のようにある。

一 酒株高百三石

神谷長四郎

造高七百五拾石

但当時休造今川村庄右衛門方二而出造仕候¹⁸⁾

つまり、神谷長四郎は天保三年の時点では造高七五〇株を所持していたものの、実態は酒造していなく、その権利を今川村庄右衛門に貸す形で酒造しており、さらにその権利を天保五年に庄右衛門に譲ったとされる。

これらのことから、少なくとも神谷長四郎は最高で一〇五〇石の酒蔵株を所持していたことになる。

天明六年（一七八六）に幕府から酒造高を半分にするように、さらに翌年には三分の一にするようにと命じられ、造酒量が制限されることになる。そこで同八年に造酒家たちより諸道具を渡してほしいと刈谷藩に願っているが、この酒造家は波右衛門（高津波村）、吉右衛門・新平・七右衛門・白井七兵衛（以上刈谷町）、神谷太郎左衛門（元刈谷村）、杉浦忠蔵・石川権右衛門・石原茂兵衛・杉浦彦五郎・田島五兵衛（以上高浜村）、源治郎・理兵衛（以上不明）に並んで神谷長四郎の名がある。これによると、天明八年の時点では七代神谷長四郎は酒造を行っていたことが確認できる。

以上のことから神谷長四郎は天明八年までは酒造を行っており、その後享和二年に酒造株の一部を売り渡して規模を縮小したのち、天保五年には残りの酒造株を売り渡して酒造から撤退したといえ

る。

② 蔵米輸送・廻船問屋

神谷長四郎の商売で勘定帳によると、享保三年には西境村の相給の一部旗本加藤明教の蔵米、享保七年には「桑名大野屋助右衛門調達御蔵米」とあるので、桑名大野屋助右衛門が請け負った蔵米、享保十九年には花園村の旗本稲垣種信、寛保元年には明知村の旗本巨勢利啓の蔵米の輸送を請け負っている。また、元文五年（一七四〇）には刈谷藩納米として刈谷藩の米も取り扱っている。

蔵米の請負について次の史料がある。

仕切状之事 浦賀屋市郎左衛門船

寅十二月朔日入

十月廿六日

一桑名米百俵 四斗入

壹石替

平均五合外三斗三升行

石メ三拾九石壹斗七升

代金三拾九兩ト拾匁式分

内

一金参両者 運賃渡而

一式拾七匁式分 持銀口銭

一銀百式拾式匁四分六厘 蔵前小揚

メ金五兩一分ト拾四匁六分六厘

引残金三拾三兩式分ト拾匁五分四厘

右之金銀不残飛脚二差為登、此表無出入相済申所仍如件

宝曆九年

卯十一月

鳥居九兵衛^⑮

神谷長四郎殿^⑯

これによると、宝曆九年（一七五九）に桑名の蔵米一〇〇俵を江戸小網町の廻船問屋鳥居九兵衛が浦賀屋市郎左衛門船によって運び荷主である神谷長四郎に出した仕切状である。

享保十九年には名古屋舟入町大橋屋市左衛門が運んだ名古屋御蔵米を買っている。大橋屋市左衛門は名古屋の廻船問屋である。

この蔵米の売買については次の史料がある。

覚

一御蔵米三百式拾五俵也

金拾兩二付現金

廿式俵六分替

代

右之通売付申上候、尤代金之義者

御役所へ御上納可成候、

其節御切手御受取可成候、以上

辰十二月

神谷長四郎^⑰

かりや町

岡本権四郎様

太田平右衛門様^⑱

からくるつながりも強かったことがうかがえる。

このほか江戸買置魚油代・江戸買干鰯代・大坂買水白油代など江戸・大坂などから多くの商品を買っている。また享保十四年以降は堺桑名屋の名が頻繁に見られ、実綿・唐物を買い入れている。また、江戸遠州屋から上州大豆を仕入れたり、新諸白を江戸へ運送していることから広範囲に商いを広げていたともいえる。

このほか、質・質かし・金有・貸金・立金・質元金・金帳など金に関わる語句も頻出することから貸金業も行っていた。

これらの商売の様子は、寛政三年（一七九一）の宗旨手形によると、男一人・女一人の計三七人の召仕、同六年には下男一人、仲間女四人・下女一〇人いたことから、その神谷家の商売隆盛ぶりを示している。

以上のことから、多くの商品を取り扱う総合商社ともいえるべき商いをしていたことが分かる。

④ 上納金

直接的な商売ではないが、神谷長四郎にとって上納金についてあわせて考えることが重要である。勘定帳には、元禄十一年では「殿へ差上」として金一三兩、同十二年では「殿上金」として金八七兩、同十四年では「殿様上置」として金八七兩、元禄十五年では刈谷藩主が交替していることもあって、「対馬殿（稲垣重富）へ上置」として金八七兩、「伊予殿（阿部正春）へ上置」として金二三兩などと藩主が稲垣氏から阿部・本多・三浦と変わっても享保十四年までほぼ毎年の如く上納金を差し出している。三浦氏が藩主になると、最初の正徳二年・三年は差し出しているが、その後はいったん途絶

ていた。

③ 麻・木綿の売買

勘定帳には享保十三年以降名古屋伝馬町京口屋九八郎の名前が頻出する。これはほとんどが麻の取引であるが、なかには享保十七年米、元文二年には和州実綿、寛保三年には大麦・小麦とある^⑲。京口屋は神谷家・鈴木家ともその主人の葬儀に参列しており、その取引

え、享保十三年・十四年にはそれぞれ金二一〇両ずつ「殿様取替年賦金」として工面している。延享四年に三浦義理が西尾藩に転封になる時には、藩主から刈谷町太田忠右衛門・大岡伝右衛門・樋口庄左衛門・本田源助・高浜村石原義兵衛・石原茂兵衛と並んで泉田村神谷長四郎に御礼として袴地二具^②ずつが渡されている。

このあと、「店方帳面ニ記し有之候上納金之覚」^②には明和五年（一七六八）〜同七年金四五八両三分、安永二年（一七七三）〜三年金三〇〇両、安永四年金一五一両、安永六年金二〇〇両、安永七年金三二一両二分、安永八年金四〇五両、安永九年金六〇九両二分、寛政元年金二二五両、寛政元年十二月金一二〇両、寛政二年金四〇両、寛政十年金三五両、寛政十一年金二〇六両、丑年（文化二年）金五五両と計金三〇七六両銀一九匁三分の上納金を差し出して

いる。
刈谷藩では、酒造業者は藩から先納金を課せられ、その代償に村々の年貢米を渡されるとされる。神谷長四郎に関する史料では上納金とあるが、これは通常いわれる御用金・調達金・先納金とほぼ同様の意味で使用されていたものであろう。

三 藩士としての神谷長四郎

神谷長四郎は御用達商人として活動が活発化していくことにより刈谷藩との関わりも随分深くなっていった。安永七年（一七七八）には刈谷藩から領内村々へ次のように触が出されている。

一 神谷長四郎、石川茂三郎、野村健右衛門、石川紋三郎、右四

四十式ケ村一通^②

三宅十太左衛門

右の史料によると、安永九年十一月十五日、神谷長四郎・石川茂三郎・野村伴右衛門は刈谷藩から格式を与えられている。これと同時高浜村田島五兵衛と杉浦彦五郎には家来分を命じている。石川茂兵衛は高浜村の酒造家、野村伴右衛門は下重原村の人で新田開発をした大資産家である。安永七年に家来分に命じられた四人のうち、神谷長四郎・石川茂三郎・野村伴右衛門の三人が一ランク上がった格式に昇格したことになる。

刈谷藩では宝暦期（一七五一〜一七六四）頃から財政が逼迫するようになり、天明元年（一七八一）になると先納金の借戻しを続け

人先達て御家来分ニ被仰付、御宛行被下候節相触候通、会積等諸士之通相心得、百姓共雨天之節下駄は勿論、頭巾等之儘ニて辞宜致間敷候、又馬方等乗打引違等無之様、急度下々迄不残様可申付候^②

右の史料にあるように刈谷藩は神谷長四郎等へ「御家来分」に命じている。町人・百姓たちへは「諸士之通相心得」とあるので、藩士になったわけではなく、藩士並の待遇を与えられたと考えるべきだろう。つまり、御用達商人のなかから特に選ばれた者に家来分という格が与えられた。
さらにこのあと、神谷長四郎は刈谷藩から格式を与えられる。

神谷長四郎

石川茂三郎

野村伴右衛門

右之条々、此度格式被仰付候間左様相心得可申候

田島五兵衛

杉浦彦五郎

右之条々、先達て野村伴右衛門通此度御家来分被仰付候間、左様相心得可申候

右之通被仰出候間、左様相心得、以来無礼無之様ニ末々迄可申付置候、此触順達留り村分可相返候、已上

十一月十五日

井上喜市

山田文左衛門

るようになったことから、これらの財政危機に対処するため、御用達商人に格を与え、更なる御用金調達を図ることを狙った刈谷藩側の施策であったと思われる。
「分限帳」によると、最初に出てくる神谷長四郎のところには、寛政六年（一七九四）十二月十八日病気に付き隠居としているので、安永九年に格式を与えられたのは、七代長四郎（法名浄和）である。その子長四郎（法名礼和）には、馬廻格を命じられることになる。

享和元年（一八〇一）十一月二十八日に末町で出火の際、「出精相働」として、神谷長四郎の家来三人に褒美として青銅一〇〇渡さされていることから、御用達商人である神谷長四郎には家来が付けられていたことがわかる。
刈谷町の御用達商人太田平右衛門の場合、天保九年（一八三八）

表 分限帳による神谷長四郎

| | |
|-------------------|----------------|
| 神谷長四郎 (7代) | |
| 寛政6.12.18 | 隠居 |
| 神谷長四郎 (8代) | |
| 寛政6.12.18 | 馬廻格 |
| 文化5.閏6.23 | 取次格 |
| 文化8.10.29 | 御勝手御用 |
| 文化13.閏8. | 隠居 |
| 神谷長四郎 (9代) | |
| 文化13.閏8.19 | 馬廻格 |
| 文政2~6 | 5か年米30俵無 |
| 文政13.閏3.10 | 隠居 |
| 神谷長四郎 (真十郎) (10代) | |
| 文政13. | 3人扶持 |
| 天保5.3.26 | 格式大小性 |
| 天保13.3. | 隠居 |
| 神谷長四郎 (泰蔵) (11代) | |
| 天保13.3.24 | 中小性格 |
| 天保14.6.18 | 中奥御番 10人扶持 |
| 弘化2.5.16 | 大小性加人 |
| 嘉永7.1.28~6. | 江戸表在番 |
| 嘉永7.2.26 | 大小性 |
| 嘉永7.4.4 | 日光表御供 |
| 嘉永7.7.26 | 大納戸当分加人 |
| 安政4.5.25 | 代官 |
| 安政5.6.4 | 奥州在番 |
| 文久1.6.5 | 奥州在番 |
| 文久3.1. | 小納戸 |
| 元治1.4.10 | 中奥番 |
| 元治1.7.8 | 大小性加人 |
| 元治1.8.19 | 武器方兼帯 |
| 元治2.3.9 | 馬廻膝代 |
| 慶応2.2.26 | 江戸在番 |
| 慶応2.6.23 | 奥州陣屋、物語郡奉行代官心得 |
| 慶応2.11.23 | 小納戸加人 |
| 慶応3.3.20 | 在番御免 |
| 慶応3.4.26 | 小納戸加人免、馬廻 |
| 慶応3.6.2 | 代官加人 |
| 慶応3.8.8 | 馬廻 |
| 慶応4.6.24 | 武器方兼帯 |
| 明治1.11.15 | 租税方加人 |
| 明治2.5.4 | 民政→兵器方 |
| 明治2.12.9 | 大広間詰 |
| 明治3.10.1 | 文館 |

十二月二十四日、刈谷藩から馬廻格を命じられている。また同時に前年一五歳になって桂之介を名乗るようになった子も馬役格を命じられている。この際藩からは紋付小袖、麻上下を拝領しているが、藩の家老・御用人・大目付・代官・郡奉行の面々に祝儀として付け届けをしている。このほか、天保十一年七月に藩主土井利祐が入部した際に「格式有之候御用達」として、岡本権四郎・田島五兵衛・太田平右衛門・山口善兵衛・田島庄九郎・井村新五郎・竹中波右衛門の七名が見られる。このことから刈谷藩では御用達商人で、御用金を相当額納めていた者に対して、藩士同様の格を与えていたことになる。また、弘化四年（一八四七）では、本メ格田島五兵衛（高浜村）・大納戸格田島庄九郎（高浜村）・大納戸格井村新五郎・小納戸格岡本権四郎（刈谷町）・格式大小性太田平右衛門（刈谷町）・小性格山口善兵衛・同竹中波右衛門・馬役格浜島太兵衛・同竹本舛三郎・賄格村瀬佐助（刈谷町）と役格の種類も御用達商人の人数も一〇名と増加している。年不詳ではあるが、幕末と考えられる寅年（安政元年か慶応二年）三月とある「御用達格式順左之通」²⁸には、取次格式・槍奉行格式・馬廻格式・小納戸格式・大小性格式・中小性格式・馬役格式・賄格・料理人格式・料理人格と一〇の格式があり、三三名の御用達の名が書かれている。

このような御用達に格式を与える事例は刈谷藩だけでなく尾張藩でも見受けられる。呉服屋である尾州茶屋は尾張藩士に近い身分が認められており、扶持も支給され、「稿本藩士名寄」にも名が載っている。また、麻類の販売を行っていた麻屋吉田家も天保四年十一月には御勝手御用達格を命じられ、年銀三枚の扶持を授かっている²⁹。林董一氏は名古屋藩の場合、御用達は、町奉行所御用達、御勝

改田百八十刈余二御除地居屋鋪之徳米ヲ以相続いたし居候処³⁰とあり、一〇代神谷長四郎真十郎が隠居して一一代長四郎泰蔵に家督を相続させたのは天保十三年であるが、その前の真十郎はすでに藩士として刈谷藩に出仕しており、屋敷も与えられている。分限帳では真十郎が相続したのが文政十三年であり、その時に三人扶持が支給されたとある。その後天保五年には「代々御勝手方御用格出情之家柄二付」という理由で格式大小性を命じられていることから、最初は役職なしではあるが、文政十三年に扶持が下されたことにより、天保五年に正式に役が与えられ、藩士になったといつてよいだろう。

四 経営の渡し

神谷長四郎家の商売は、勘定帳によると、享保年間（一七二六～一七三六）に四年ほど赤字がみられるが、そのほかは利益が出ており、特に元文三年（一七八三）では八五二両もの利益が出ていた。しかし、元文五年から寛保三年（一七四三）まで四年連続で赤字経営であった。特に勘定帳の最後の記載になる寛保三年では一四八八両余もの赤字であった。その後の経営状況を知ることができないが、寛政五年（一七九三）と推測される史料には次のようである。

乍恐奉願上口上之覚

泉田村

神谷長四郎方

文吉

孫六

手御用達格次座、御勝手御用達格等に分けられ、それは御用金の上納に耐えうるだけの資産の有無、程度について認定されるとしている²⁸。西尾藩の場合、酒造業の近江屋太田家は藩の御用達を勤めており、弘化三年の西尾分限帳には用達並として太田庄右衛門の名がみえる²⁹とされる。

これらのことから、刈谷藩では尾張藩・西尾藩等と同様に御用達商人に格式が与えられていた。最初は安永七年に家来分という待遇を与えられたのをはじめとし、同九年には格式となり、その後馬廻格等多くの格式が作られ与えられていった。これらはいずれも御用達商人に与えられた格式であつて藩士の一員という役ではなかった。したがって分限帳には書かれない。

先の天保十一年・弘化四年の刈谷藩の御用達商人の書上げの中に神谷長四郎の名はない。これは後述するが遅くとも文政二年（一八一九）には商売を譲り渡す形で撤退しているからである。

ではいつ神谷長四郎が御用商人から刈谷藩士として取りたてられたかについて検討する。九代神谷長四郎が文化十三年（一八一六）に八代長四郎から相続を受けて馬廻格を与えられるが、文政二年から六年にかけて米三〇俵が与えられていない。これは文政二年には商売をやめて文助に経営権を譲渡している時期と重なっていることから、文政二年には御用達商人ではなくなったことを表している。

一〇代神谷長四郎真十郎から一一代長四郎泰蔵への相続について、嘉永二年（一八四九）の史料に、「五ヶ年以前身上相続弟泰蔵二相譲り候節、刈谷表へ奉公出勤二居候処不都合二付同処二居屋鋪相願相住居候而、此方居宅身上二ツ二いたし、弟事ハ先年分被下置候御扶持参米三人二七人増都合十人扶持、此方ハ借財付田徳ハ源左

一私共本家長四郎儀、近年商売向不時之災難等御座候而、他借入金致増長、勝手不如意ニ罷成り、相続難成必至ニ差詰候付、家財分散仕候分外愚案無御座、家族之者共甚愁歎仕候条別紙を以奉申上候趣ニ御座候、何卒此段御憐察被下置蒙 御指図借財相形付、家相続相成候様仕度親類別家之者共一同二右之趣私共分御願申上げ、以御慈恩御賢慮被下置候様御願可奉申上候様幾重ニ茂奉願上候、已上
（寛政五年）³¹
丑五月

右の史料にあるように、寛政五年頃、つまり七代長四郎の頃より商売の雲行きがおかしくなつて行き詰まり、神谷長四郎は商売の経営権を家系的にも関係があつた鈴木文助家へ譲渡することとなつた。

神谷家と鈴木家の関係は勘定帳の宝永七年（一七一〇）に金六両を「文助江戸もどり金」とあり、これは初代文助が江戸へ買付に行つた時の仕金で、文助は神谷長四郎方で何らかの仕事をしていた。

鈴木姓が見られるのは、明和七年（一七七〇）には鈴木孫吉とある。この孫吉については、延享三年（一七四六）十二月に五代神谷長四郎から、田四石六斗九升三合、畑一石一斗四升を譲られている。四代長四郎は延享二年に没していることから、四代長四郎の子、五代長四郎の弟であつたのを、初代文助の養子にはいっただけではないかと思われる。また、天明元年（一七八一）には七代神谷長四郎から文吉に下田一石七斗八升五合三勺八才、孫六に下田五斗九升七合六勺八才を譲っている。また、文吉には文化九年（一八一二）十月に田地分徳米三俵を吾脩（七代長四郎、法名釈浄和）の遺物として

譲られている。享保十七年から寛保三年まで（寛保三年が最後である）「店守孫六」とある。孫六は神谷長四郎の店の店主として仕切っていたことがわかる。

寛政八年には、大和屋が金三〇両を借りているが、この宛先には、「神谷長四郎殿、同文吉殿」と連名で書かれていることと文吉は神谷姓であることが分かる。また、また寛政九年には永田藤兵衛が金一五両を文吉から借りているが、「神谷様御店鈴木文吉様」「神谷御氏御氏文吉」とあることから神谷長四郎の店に勤めていたことがわかる。このことから文吉、孫六は六代長四郎の子で、七代長四郎の弟と思われる。つまり、鈴木家は神谷長四郎家から二代続けて養子に入ったと思われる。

文助が文政二年（一八一九）に家引・店引とあり、文助が神谷長四郎の店を引き継ぐことになった。この文助は四代目文助であり、三代目文吉が文政元年に没したあと、神谷長四郎家の商売を引き継いだ。そのあと文政六年に鈴木文助名義の大福帳が残っていることからその説を裏付けされる。また、その大福帳の中に、金一〇両を本家（神谷家）に居宅と元出店分として年に二両ずつ五か年賦で返しており、文政六年に返済が終ったことが記されている。

文政六年の大福帳では金銭貸与に伴う利息の返済の記録であるため、当初は金融業として独立したのではないかと想像できる。しかし、同大福帳のなかに、文政九年から「仲買仲間活用講」という頼母子に参加していることから当初から神谷長四郎の総合商社的な取引をしていたものと思われる。

角文という屋号は史料の上では、文政六年が上限である。神谷長四郎の家を文政二年に引き継いでいるので、すぐに商売をはじめ

- 頁。『泉田の今昔』には唄の検討を行っており、成立時期を寛政八年（一七九六）～文政六年（一八二二）の間であろうとしている（泉田郷土研究会編『泉田の今昔』泉田郷土研究会、二〇二二、九九～一〇一頁）
- (2) 鈴木孝平家文書、刈谷市歴史博物館蔵、以下同
- (3) 鈴木孝平家文書
- (4) 村上文庫、刈谷市中央図書館蔵、以下同
- (5) 村上文庫
- (6) 村上文庫
- (7) 『参河志』愛知県幡豆郡教育会、一九二二、四一〇～四一一頁
- (8) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史』第二巻、刈谷市、一九九四、四一頁
- (9) 『寛政重修諸家譜』巻第四十七
- (10) 「塩髯」村上文庫
- (11) 広島県史編『広島県史』近世資料編1、一九七三
- (12) 鈴木孝平家文書
- (13) 三浦家文書、岡山大学附属図書館蔵
- (14) 安城市史編集委員会編『新編安城市史』2、安城市、二〇〇七、五一～四頁
- (15) 刈谷市誌編さん委員会編『刈谷市誌』刈谷市役所、一九六〇、一八九頁
- (16) 神谷和正『近世三河の酒造業』私家版、一九九六、三七頁
- (17) 神谷和正『近世三河の酒造業』私家版、一九九六、三七頁
- (18) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史』第六巻、刈谷市、一九九二、三九九頁

たかどうかは不明であるが、始めたのならば何らかの屋号があったのではないかと思われるが、史料では確認できない。天保五年（一八三四）に「角屋文助」、天保十五年「角屋文助」、嘉永七年（一八五四）に「角屋文助」とある。天保五年の「大福売買万書出帳」には酒・杉・醤油などの商品の名が見られるようになり、特に材木の名前がみられることが特徴である。ただし、このあと、慶応三年（一八六七）の大福帳、明治七年の大福帳には材木の取引が主であることから、その後材木業としてシフトしていったのではないだろうか。

おわりに

神谷長四郎は三河国碧海郡泉田村で活躍した豪商である。近郷の村々だけでなく、江戸・大坂等遠くまで活動を広めていった。江戸時代中期では三河国内でもトップクラスの商人であった。商いの中心は酒造が始まりであったと考えられるが、そのほか蔵米の輸送、綿・干鰯・麦などの商品の中継ぎや金貸しなど幅広く行い、規模を大きくしていった。

その規模が大きくなると刈谷藩とのつながりも強くなっていき、早くから御用達商人としての地位を確立したが、藩にとっては御用金を徴収する絶好の相手であった。

註

- (1) 刈谷市誌編さん委員会編『刈谷市誌』刈谷市、一九六〇、八一二
- (19) 加塚耕治家文書
- (20) 太田宗一郎家文書、刈谷市歴史博物館蔵
- (21) 京口屋は慶長十九年に酒類を扱うことを生業としてきたとされる（山本花子『基盤割商家の暮らし』愛知県郷土資料刊行会、一九九六、一九頁）。同書の序文としての論考で、林董一氏は京口屋が慶長以来継続して酒の卸小売を営業してきたということに疑問を持ち、近世初期から一貫して酒卸小売を営んできたわけではないとしているが、取引からも、京口屋は麻を中心に綿・麦などの取り扱いをしてきたことがわかる。
- (22) 鈴木孝平家文書
- (23) 刈谷市教育委員会編『刈谷町庄屋留帳』第二〇巻、刈谷市、一九八八、六二八～六二九頁
- (24) 刈谷市教育委員会編『刈谷町庄屋留帳』第四巻、刈谷市、一九七八、五八九頁、原史料を確認の上、一部修正を行った。
- (25) 刈谷古文書研究会編『分限帳』西村書房、一九九八
- (26) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史』第六巻資料近世、刈谷市、一九九二、一三六～一三七頁
- (27) 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第三巻、名古屋市、一九九九、六〇五頁、六二八頁
- (28) 林董一『近世名古屋商人の研究』名古屋大学出版会、一九九四、九九頁
- (29) 西尾市史編集委員会『西尾市史』古代中世近世上、西尾市、一九七四、八八三頁
- (30) 鈴木孝平家文書
- (31) 鈴木孝平家文書

の改築を中心とした大規模な造営事業が計画され、それに伴って2001年から2003年にかけて刈谷市教育委員会が主体となり、確認調査が行われた。これらの調査の成果として、第1次調査（2001年）、第2次調査（2002年）から、貝層は神社境内の北西部から南西部にかけて広がっていることが明らかとなったが、同時に貝層の分布しない区域が存在することも確認された。この空間は周りを貝塚に囲まれた空間であると推定されたが、その空間がどのような意味を有していたのかを示唆する遺物・遺構は確認されなかった。また、出土遺物としては、1969年の調査と同様に、土器、石器、骨角器などの豊富な遺物が出土しただけでなく、土坑墓や土器棺墓といった多くの埋葬関係の遺構が検出された（刈谷市2021）。

近年、本刈谷貝塚の発掘調査を行う機会はないが、貝塚の残存する部分はまだ存在することが推定されることや居住区域なども明確となっていないため、今後の調査が期待される。

5 おわりに

本稿では、調査報告書の補遺として、出土点数が少ない丸玉の報告を行った。これまで、土器研究を中心に行われてきた本刈谷貝塚であるが、今後はその他の豊富な資料についても注目し、多角的な視点から本刈谷貝塚の実像に迫っていきたいと思っている。県指定史跡である本刈谷貝塚の発掘調査が行われる機会は多くはないと思われるが、刈谷市歴史博物館には、過去の採集品で未整理となっている遺物も多く所蔵されており、新たな遺物の出土も待ち遠しいが、山積みとなっている多くの遺物を含めて調査・研究を継続していくことも重要な課題であるだろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、下記の方々には多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

鵜飼堅証、長田友也、川合剛、平井義敏、山内良祐（敬称略、五十音順）

参考文献

刈谷市教育委員会1972『本刈谷貝塚』

刈谷市教育委員会1997『刈谷の考古資料図録－谷沢靖氏寄贈資料Ⅱ－』 pp.110-118

刈谷市2021『愛知県指定史跡 本刈谷貝塚確認調査報告書』

久永春男・山内清男1950「三河の晩期縄文式文化」『日本考古学協会第5回総会研究発表』

吉田富夫・杉原荘介1939「東海地方先史時代土器の研究」『人類学・先史学講座 第13巻』
pp. 1-51

[資料紹介]

本刈谷貝塚出土の装飾品について

—愛知県指定史跡本刈谷貝塚確認調査報告書・補遺—

野村啓輔

1 はじめに

本刈谷貝塚は、刈谷市天王町に位置する縄文時代晩期前葉を主体とする貝塚で、尾張東部から西三河を中心に分布する晩期前葉の土器型式である元刈谷式土器の標識遺跡として知られる遺跡である。

遺跡は、境川と逢妻川が南へ併流し、猿渡川と合流して衣浦湾へ注ぐ河口に近く、西三河の南西部一帯に広がる碧海台地の西端に位置している。遺跡の標高は8～9mで、北と西を小支谷に囲まれ、北西に向かって突出した舌状の台地端部にハイガイを中心とした貝塚が形成されている。

2021年に2001年から2003年にかけて行われた確認調査の報告書が刊行された（刈谷市2021）が、その後、2003年に行われた第3次調査のブロックサンプル中において石製丸玉と土製丸玉が確認された。このような装飾品については、これまでの調査においても出土していたが、点数は少なく、重要な遺物であると思われたため、本稿では調査報告書の補遺として報告する。

2 ブロックサンプルについて

今回報告する丸玉は、2003年の本刈谷貝塚第3次調査の第2トレンチ北壁の貝層ブロックサンプルに含まれていたものである。このブロックサンプルの詳細は、本紀要58（1）ページに掲載されている新美倫子氏の報告をご参照いただきたい。

3 本刈谷貝塚出土の装飾品について

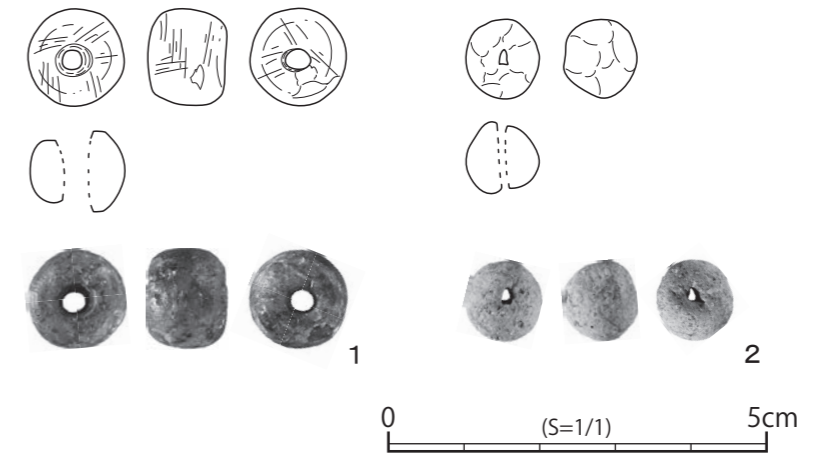
今回報告する資料は石製丸玉1点と土製丸玉1点の計2点である（第1図、第1表）。

1は滑石製の丸玉である。中央には穿孔が行われており、全体的に研磨が施され、滑らかになっている。孔の大きさを見ると、時間的な前後関係は不明であるが、正面側が裏面側よりも深く穿孔され、孔も大きくなっていることがわかる。

2は土製丸玉である。中央には棒状工具による穿孔が行われている。胎土には黒雲母、石英、長石を含む。

4 本刈谷貝塚について

本刈谷貝塚は、1928年に東京帝国大学によって編纂された『日本石器時代遺物発見地名表』で紹介されるなど、古くから知られていた貝塚である。しかし、本格的な発掘調査が行われるのはまだ先であり、刈谷の郷土史研究者である加藤巖による踏査や貝塚状況の記録、刈谷高校教諭であった谷沢靖による踏査、試掘調査が行われる程度であったが、このような活動により資料は蓄積し、



第1図 第3次調査出土装飾品

第1表 第3次調査出土装飾品の観察表

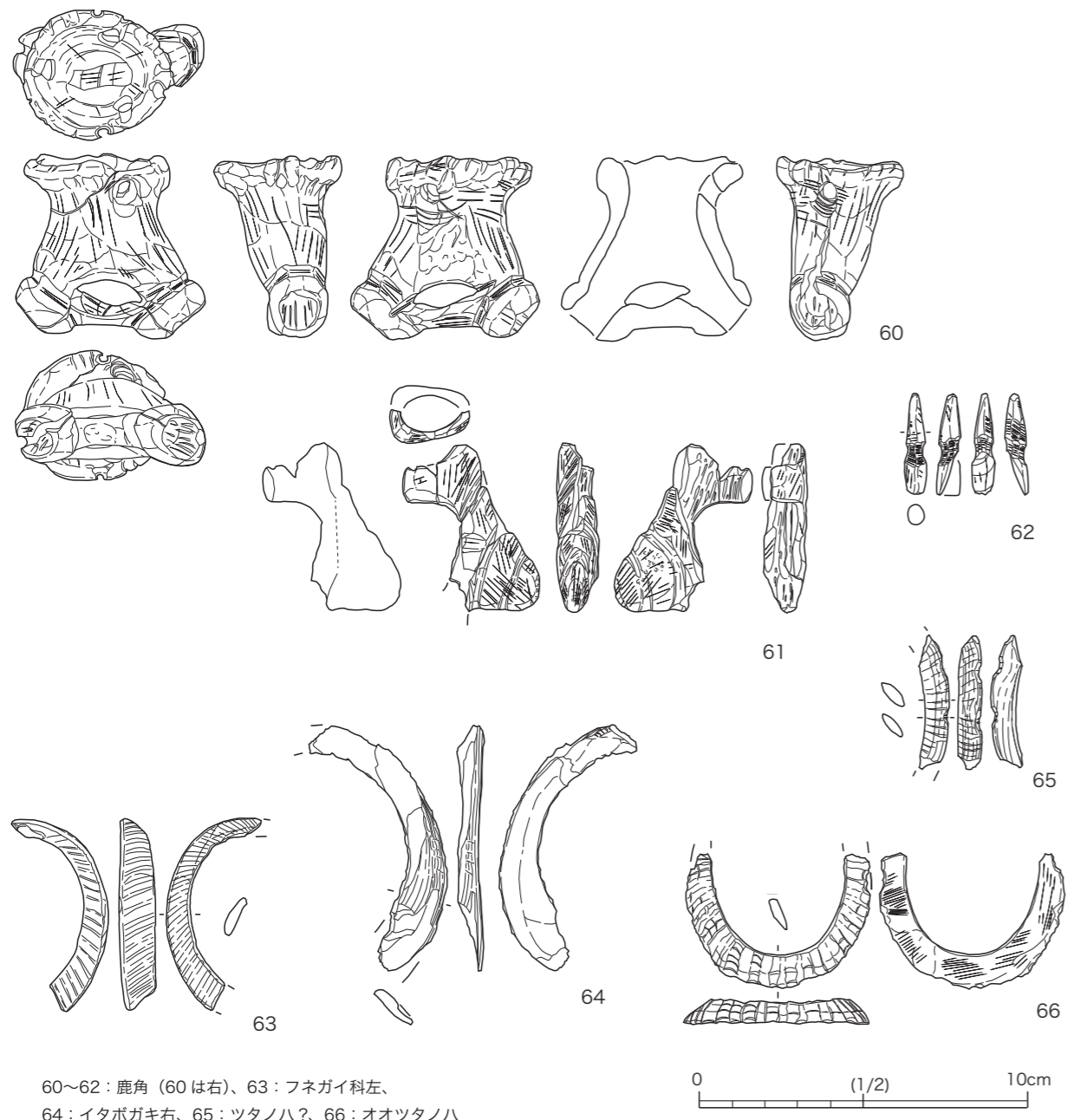
| 図版番号 | 器種 | 調査年度 | 石材 | 調査区 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大圧 (mm) | 重量 (g) | 色調 |
|------|------|-------|----|--------|----------|----------|----------|--------|----------------|
| 1 | 石製丸玉 | 第3次調査 | 滑石 | 第2トレンチ | 12.58 | 12.67 | 10.02 | 2.46 | — |
| 2 | 土製丸玉 | 第3次調査 | — | 第2トレンチ | 10.09 | 9.59 | 9.55 | 0.79 | 10YR6/2 灰黄褐 |

西三河地方における大規模な貝塚の一つとして本刈谷貝塚は認識されていく。

本刈谷貝塚に関連する研究としては、先人たちによる踏査などによって半截竹管文系条痕土器という特徴的な土器が確認されていたこともあり、土器研究を中心に進められてきた。半截竹管文系条痕土器は、1939年に吉田富夫・杉原荘介によって、名古屋市緑区に位置する雷貝塚出土の土器を基に「雷式土器」と設定され、雷式土器が出土する遺跡に本刈谷貝塚も含まれている（吉田・杉原1939）。その後、久永春男・山内清男によって、本刈谷貝塚出土の土器は縄文時代晩期の土器に位置付けられ、吉田・杉原の設定した雷式土器の細分が行われた。その成果は1950年に開催された日本考古学協会第5回総会において報告され、碧海台地における晩期の土器が「寺津式土器」→「元刈谷式土器」→「桜井式土器」という順の編年が示されたことによって、本刈谷貝塚出土の土器は「元刈谷式土器」と呼称され、標識遺跡とされた経緯がある（久永・山内1950）。また、1997年には刈谷市教育委員会によって、『刈谷の考古資料図録』が刊行されており、そこでは、谷沢靖によって採集された本刈谷貝塚の土器が掲載されている（刈谷市教育委員会1997）。このように本刈谷貝塚についての研究は土器が中心であり、その中でも編年の構築や型式の細分が行われている。

1969年には道路造成の計画に伴い、本刈谷貝塚における本格的な発掘調査が初めて行われることとなった。対象となったのは、遺跡北端部の約500㎡で、その調査区内には3つの地点に貝層のまとまりが確認された。出土遺物としては、石器や土器のみならず、骨角器なども出土し、また、土坑墓などの遺構についても検出されたが、この調査でとりわけ注目されるものとしては、三河湾沿岸地域に特徴的にみられる盤状集骨墓が検出されたことだろう（刈谷市教育委員会1972）。

その後、しばらく大きな発掘調査が行われることはなかったが、2000年に本殿の改修と社務所

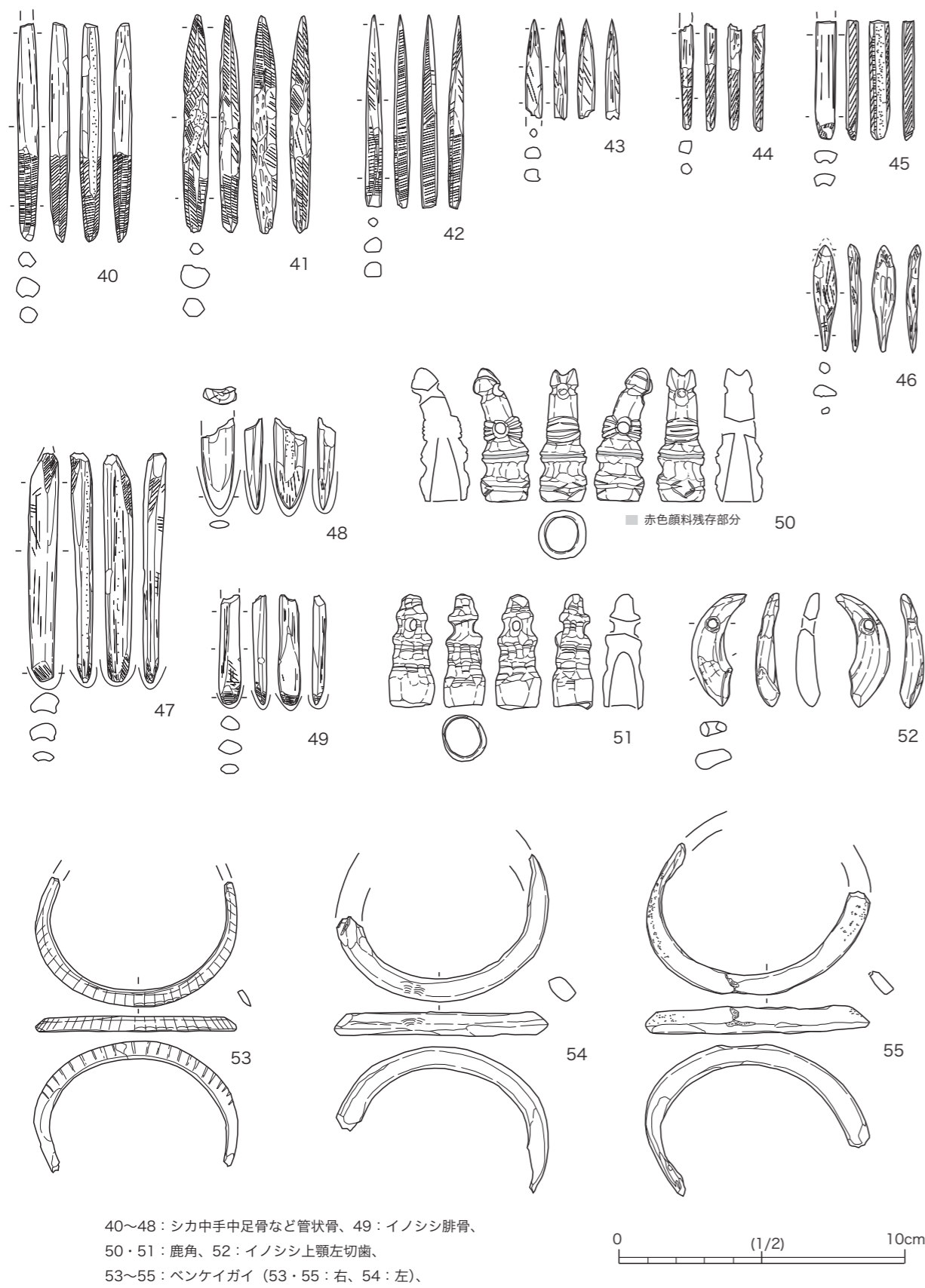


60～62：鹿角（60は右）、63：フネガイ科左、
64：イタボガキ右、65：ツタノハ？、66：オオツタノハ

図7 本刈谷貝塚出土骨角器(鶴飼他 2021 より)

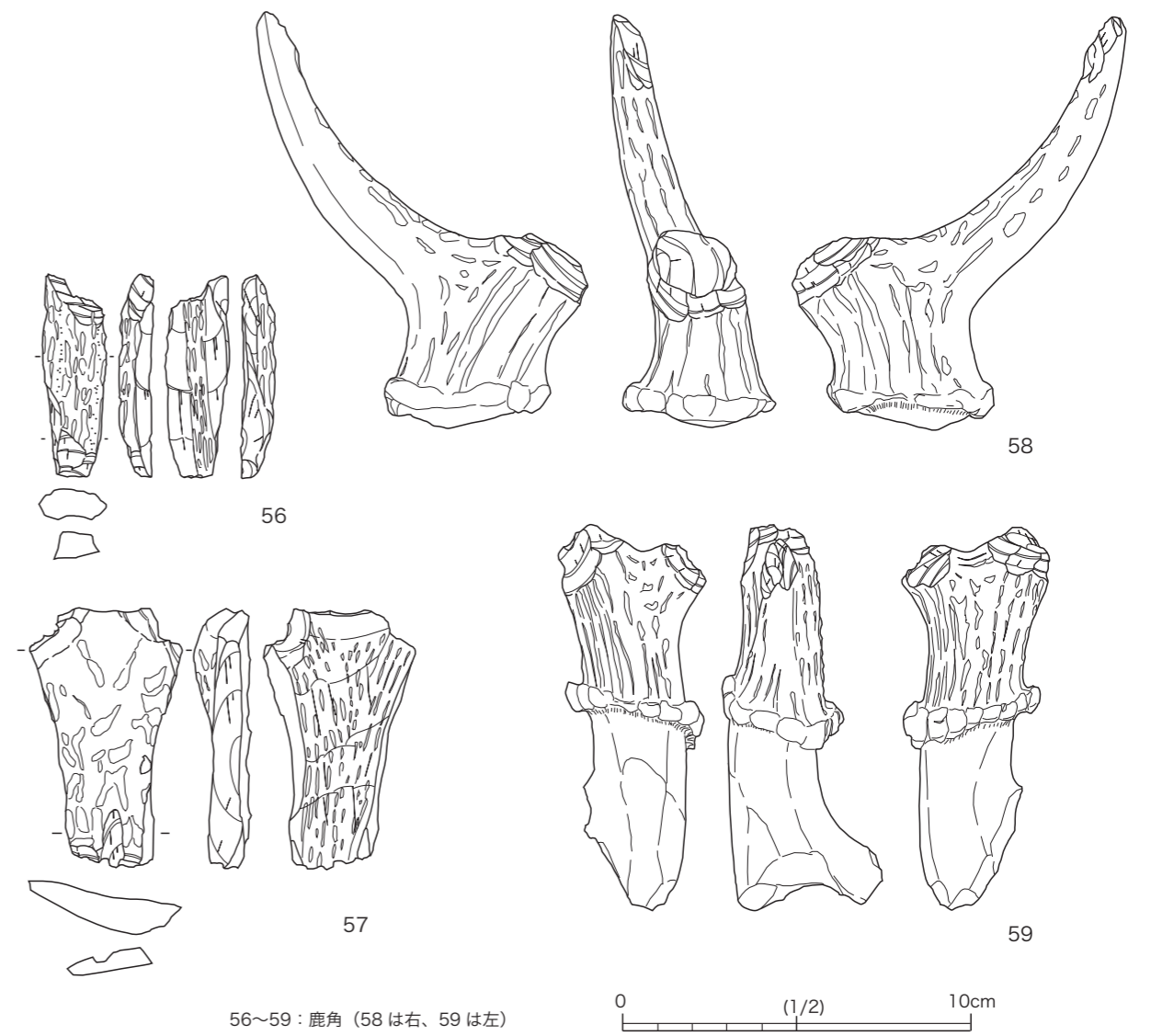
表2 本刈谷貝塚出土骨角器点数一覧

| 器種大分類 | 器種 | 分類・素材 | 調査年・文献 | | | | 合計数 | |
|---------|-------------|-------------|---------------------|----------------------|-----------------------|------------------|-----|----|
| | | | 昭和44年以前 (谷沢1972) | 昭和44年 (加藤・斎藤1972) | 平成13～15年 (鶴飼編2021) | 平成13～15年 (本稿) | | |
| 利器・工具類 | 骨製ヤス・鏝 | シカ管状骨 | 5 | 25 | 46 | 8 | 84 | |
| | | エイ尾棘 | | 2 | | 1 | 3 | |
| | 根挟み | 鹿角 | 4 | 3 | | 4 | 11 | |
| | 釣針 | 鹿角 | 1 | | | | 1 | |
| | 錐などの刺突具 | シカ中手・中足骨など | | | 4 | | 4 | |
| | その他刺突具 | 鹿角 | | ○ | | 1 | 1以上 | |
| | ヘラ類 | シカ中手・中足骨など | 1 | | 5 | 3 | 9 | |
| 装身具・儀器類 | 弭形製品 | 角形 | 1 | 1 | | | 2 | |
| | 鹿角製装身具類 | 川添分類A類(腰飾り) | | | 1 | | 1 | |
| | | 川添分類D類(腰飾り) | | | 1 | | 1 | |
| | イノシシ牙製品 | 勾玉形状 | | | | 1 | 1 | |
| | 歯牙製垂飾 | イノシシ切歯 | 1 | | | | 1 | |
| | 孔のある軟骨魚類脊椎骨 | 白玉形状 | 1 | | | 10 | 11 | |
| | 不明品 | 鹿角 | | | 2 | | 2 | |
| | | ペンケイガイ | 3 | 5 | | | 8 | |
| | | 貝輪 | フネガイ科 | | 18 | 1 | | 19 |
| | | | イタボガキ | | | 1 | | 1 |
| | ツタノハ・オオツタノハ | | | 2 | | 2 | | |
| 製作関連器種 | 角座残存部 | 鹿角 | | ○ | | 3 | 3以上 | |
| | 加工痕のある鹿角 | 鹿角 | | ○ | | 1 | 1以上 | |
| | 加工された鹿角 | 鹿角 | | ○ | | 1 | 1以上 | |
| | 加工された骨 | シカ中手・中足骨など | | ○ | | 5 | 5以上 | |



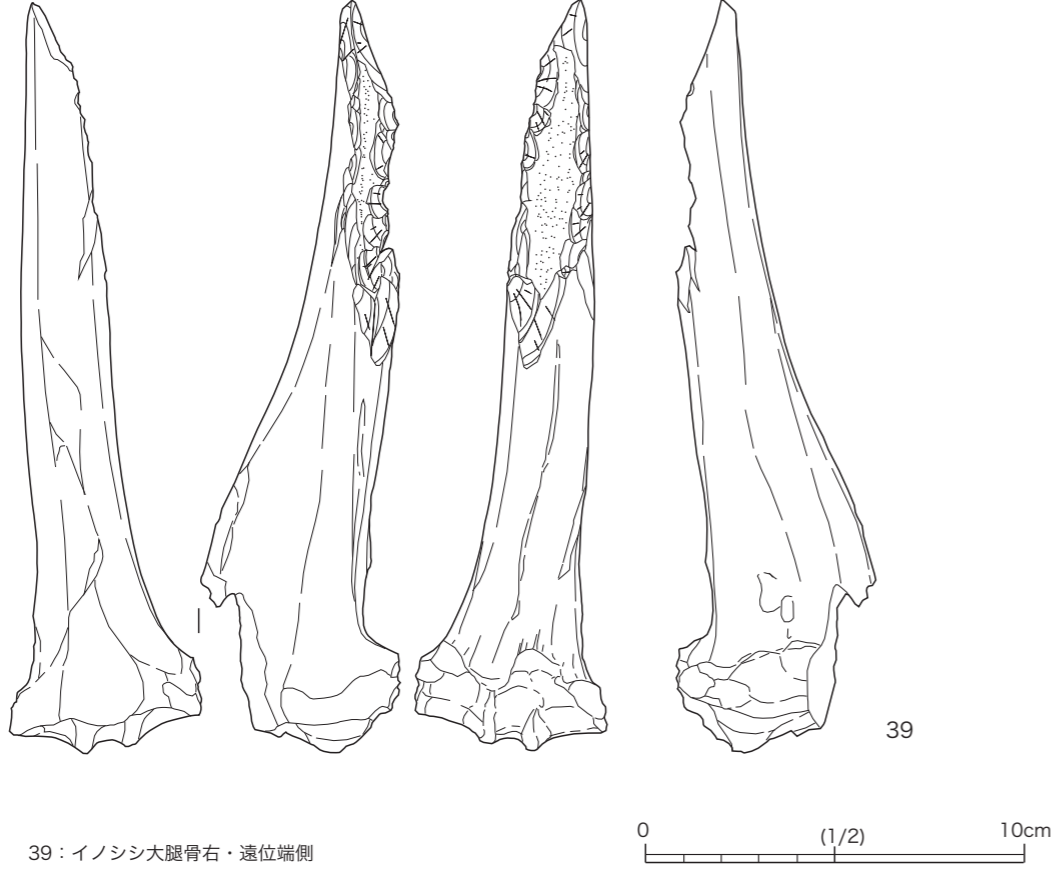
40~48：シカ中手中足骨など管状骨、49：イノシシ肋骨、
 50・51：鹿角、52：イノシシ上顎左切歯、
 53~55：ベンケイガイ（53・55：右、54：左）、

図5 本刈谷貝塚出土骨角器(1972 報告分 1)



56~59：鹿角（58は右、59は左）

図6 本刈谷貝塚出土骨角器(1972 報告分 2)

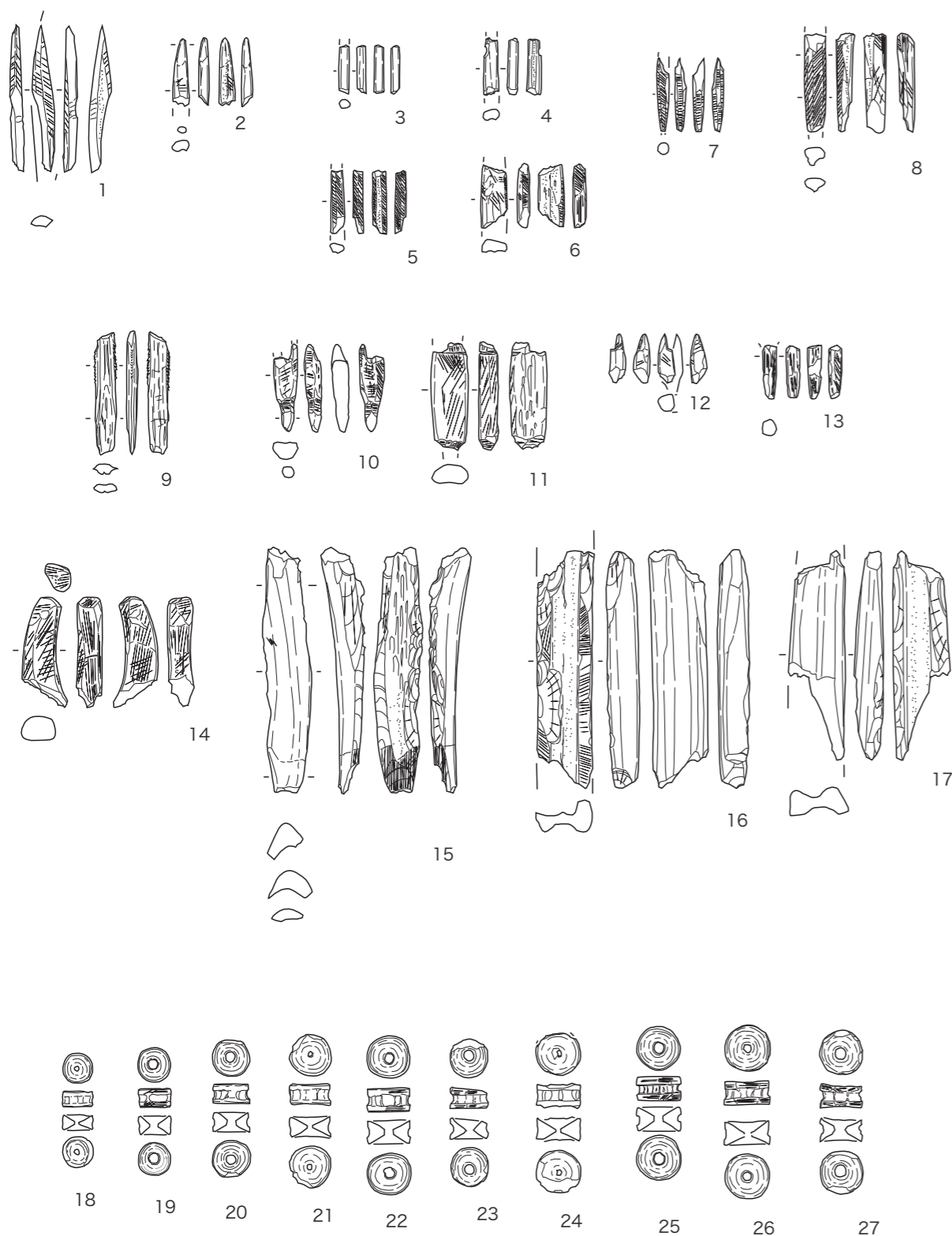


39：イノシシ大腿骨右・遠位端側

図4 本刈谷貝塚出土骨角器3

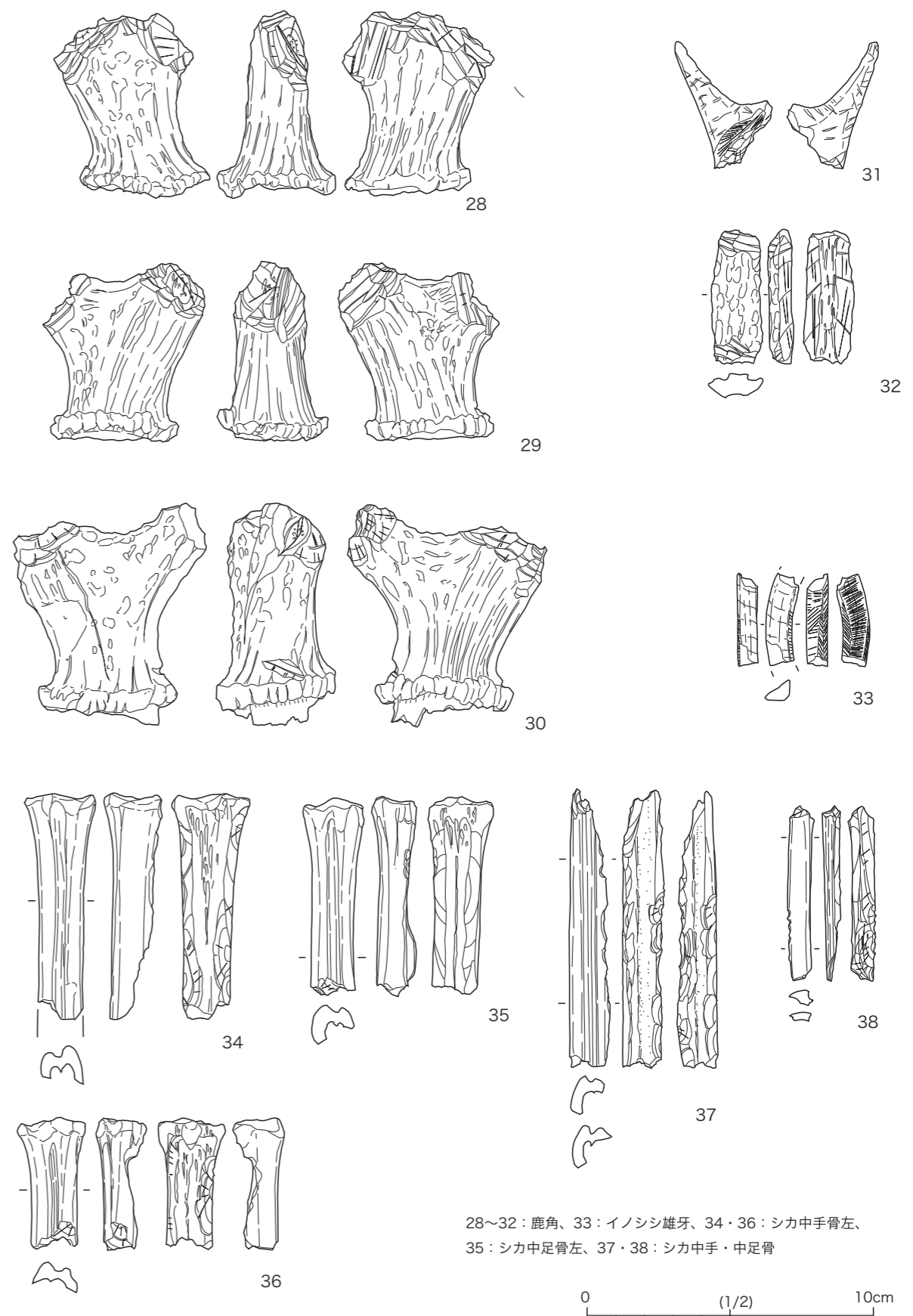
表1 本刈谷貝塚出土骨角器一覧(本紙報告分のみ)

| 遺物No | 器 種 名 | | | 調査年 | 出 土 地 点 | | 法 量 | | 素 材 | 半載・非半載 | 残 存 状 況 | 備 考 |
|------|---------|-------------|----------|------|-----------------|-----------|--------|--------|--------------------|--------|-----------|---------|
| | 分類1 | 分類2 | 分類3 | | グリップ・遺構など | 層位など | 長さ(cm) | 幅(cm) | | | | |
| 1 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2001 | TP11 | | (4.95) | (0.85) | シカ中足骨 | 半載 | 基部欠 | |
| 2 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2002 | 4区-1④ | 貝層10~20cm | (2.34) | 0.57 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 先端のみ | |
| 3 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2003 | 調査区A A-2g④ | 貝層0~5cm | (1.64) | 0.33 | シカ管状骨 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 4 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2003 | 第7トレンチ⑤ | 貝層0~5cm | (1.89) | 0.56 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 5 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2002 | 2区-4 | 貝層 | (2.12) | (0.53) | シカ中手・中足骨 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 6 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2002 | 4区-1② | 貝層10~20cm | (2.13) | 0.87 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 7 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2003 | 第1トレンチ③・④ | | (2.48) | 0.47 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 基部のみ | |
| 8 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤス | 2003 | 第5トレンチ SK02 | 1層 | (3.34) | 0.74 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 基部のみ | |
| 9 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | ヤスori鑑 | 2002 | 2区-4 | 貝層 | (4.12) | 0.78 | エゾ尾棘 | 非半載 | 先端部・基部欠 | |
| 10 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | 根抜き | 2002 | 8a区-2 | 貝層 | (2.96) | 0.83 | 鹿角 | 半載 | 先端部欠 | |
| 11 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | 根抜き | 2003 | 第8トレンチ⑧ | 貝層15~20cm | (3.61) | 1.25 | 鹿角 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 12 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | 根抜き | 2001 | TP11 | 2層 | (1.64) | (0.57) | 鹿角 | 半載 | 先端部半欠・基部欠 | |
| 13 | 利器・工具類 | 点状刺突具類 | 根抜き | 2002 | 4区-1① | 貝層0~10cm | (1.78) | (0.51) | 鹿角 | 半載 | 基部のみ | |
| 14 | 利器・工具類 | 刺突具類 | | 2003 | 第5トレンチ② | 貝層0~10cm | (3.70) | (0.93) | 鹿角・枝 | 半載 | 先端のみ | |
| 15 | 利器・工具類 | ヘラ | | 2003 | 第1トレンチ④ | 貝層0~10cm | (8.23) | 1.67 | シカ中手・中足骨 | 半載 | 基部端欠 | |
| 16 | 利器・工具類 | ヘラ | | 2002 | 6区-1① | 貝層0~10cm | (7.95) | 1.99 | シカ中足骨左 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 17 | 利器・工具類 | ヘラ | | 2003 | 第4トレンチ①~③ | カクニ | (7.01) | 1.91 | シカ中手骨左 | 半載 | 先端部・基部欠 | |
| 18 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2002 | 4区-3④ | 貝層0~10cm | 1.04 | 1.03 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 完形 | 被熱痕 |
| 19 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第9トレンチ② | 上層 | 1.14 | 1.10 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 完形 | |
| 20 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第4トレンチ P6 | 貝層 | (1.21) | 1.26 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 完形 | |
| 21 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2002 | 4区-3④ | 貝層0~10cm | (1.40) | (1.38) | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 一部欠 | |
| 22 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第5トレンチ⑧ | 貝層5~10cm | 1.43 | 1.45 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 完形 | |
| 23 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第6トレンチ④ | 貝層上面層 | (1.27) | 1.27 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 一部欠 | |
| 24 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2002 | 4区-3⑤ | 貝層10~20cm | (1.41) | 1.50 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 一部欠 | |
| 25 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第8トレンチ⑤ | 貝層15~20cm | 1.50 | 1.49 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 一部欠 | |
| 26 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第6トレンチ⑤ | 貝層5~10cm | 1.55 | 1.60 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 完形 | 赤色顔料痕跡? |
| 27 | 装身具・儀器類 | 玉類 | 白玉状 | 2003 | 第5トレンチ⑦ 西サアト | 貝層 | 1.53 | 1.47 | 軟骨魚類脊椎骨 | 非半載 | 一部欠 | |
| 28 | 製作関連器類 | 角座残存部 | | 2003 | 第9トレンチ P4 | | 6.49 | 5.47 | 鹿角右・角座~第一枝分岐点【落向】 | 非半載 | | |
| 29 | 製作関連器類 | 角座残存部 | | 2003 | 第8トレンチ⑤ | 貝層5~10cm | 6.25 | 5.68 | 鹿角右・角座~第一枝分岐点【落向】 | 非半載 | | |
| 30 | 製作関連器類 | 角座残存部 | | 2003 | 第6トレンチ③ | 貝層下層土器集中 | 7.83 | 6.73 | 鹿角右・角座~第一枝分岐点【非落向】 | 非半載 | | |
| 31 | 製作関連器類 | 加工痕のある鹿角 | | 2003 | 第5トレンチ② | 貝層20~30cm | 4.69 | 1.87 | 鹿角・枝 | 半載 | | |
| 32 | 製作関連器類 | 加工された鹿角 | 根抜きなどに対応 | 2003 | 第5トレンチ① | 貝層上部検出 | 4.17 | 0.83 | 鹿角 | 半載 | | |
| 33 | 製作関連器類 | 加工されたイノシシ雄牙 | | 2003 | 第6トレンチ① | 貝層0~5cm | (3.22) | 0.77 | イノシシ雄犬歯 | 半載 | 一部のみ | |
| 34 | 製作関連器類 | 加工された骨 | | 2003 | 第10トレンチ SK01 | 1区中層 | 7.88 | 2.54 | シカ中手骨左・近位端側 | 半載 | | |
| 35 | 製作関連器類 | 加工された骨 | | 2003 | 第7トレンチ⑤ | 貝層10~15cm | 6.92 | 2.24 | シカ中足骨左・近位端側 | 半載 | | |
| 36 | 製作関連器類 | 加工された骨 | | 2002 | 4区-4 SK03 | 上層 | 4.66 | 2.41 | シカ中手骨左・近位端側 | 半載 | | |
| 37 | 製作関連器類 | 加工された骨 | | 2003 | 第5トレンチ SK02 | 1層 | 9.74 | 1.45 | シカ中手・中足骨 | 半載 | | 被熱痕 |
| 38 | 製作関連器類 | 加工された骨 | | 2003 | 第7トレンチ⑥ | ハマグリ集中区 | 6.13 | 0.99 | シカ中足骨か | 半載 | | |
| 39 | その他 | 敲打痕跡のある骨 | | 2002 | 4区-3③ | 貝層30cm~ | 19.91 | 5.17 | イノシシ大腿骨右・遠位端側 | 非半載 | | |



1~8: シカ中手・中足骨などの管状骨、9: エイ尾棘、10~14: 鹿角、
15: シカ中手・中足骨、16: シカ中足骨左、17: シカ中手骨左
18~27: 軟骨魚類脊椎骨

図2 本刈谷貝塚出土骨角器1



28~32: 鹿角、33: イノシシ雄牙、34・36: シカ中手骨左、
35: シカ中足骨左、37・38: シカ中手・中足骨

図3 本刈谷貝塚出土骨角器2

4 本刈谷貝塚出土骨角器の様相

ここでは、これまでの本刈谷貝塚出土骨角器をまとめて、その様相について若干の私見を述べておく(図5~7、表2)。

1972報告書では、昭和44年調査資料およびそれ以前から知られている出土資料が掲載されている(谷沢1972)。器種名や素材種の分類は、筆者の分類に揃えたため、これまでの報告とは若干集計結果が異なっている。また、文章記載のみであるが、昭和44年以前の資料として、鹿角製釣針1点とベンケイガイ製貝輪3点も出土しているというので、それも追記した(谷沢1972)。昭和44年調査資料およびそれ以前の出土資料について、これまで筆者が図化を実施したものについても合わせて提示しておく(図5・6)。また、図7には2021報告書の中で、縄文時代の装身具・儀器類と考えられる器種について、再度掲載した。

利器・工具類については、やはり骨製のヤス・鎌が多数出土していることが注目される。出土資料を見ると、7cmを越える長い状態で出土するものよりも、5cm前後と短い状態で出土するものが圧倒的に多い。また、根挟みやエイ尾棘製の点状刺突具類の出土と、毒矢の存在が裏付けられる器種がまとまっているのも、東海西部の縄文晩期前半の特徴である。シカ中手・中足骨製のヘラが出土するなか、イノシシ腓骨製品のヘラも1点確認されている(図5の49)。土器の施文具などに使用されたものであろうか。

装身具・儀器類では、2021報告書でとても重要な事実が明らかとなった。一点目は、鹿角製装身具類の中でも、吉胡貝塚で圧倒的に集中して存在するA類(川添2019)が、西三河地域ではじめて確認されたことである(図7の61)。貝輪ではオオツタノハ製貝輪が見つかったことも注目される(図7の65・66)。また、貝輪では、より加工の進んだ段階の資料が多い上に、1)フネガイ科の資料点数が圧倒的に多いこと、2)ベンケイガイ製の方が、全体の形状が窺える状態の残存となっていること、と東海西部の貝輪資料群の在り方から見ると、特異な状況となっているのである(川添2019)。近年、西尾市枯木宮貝塚でも新たな装身具類資料が報告されたことも合わせて(川添2022)、当地社会集団間の関係を見る上で、今後注目しなくてはならない点であるといえる。

また、鹿角の製作関連器種についても述べておく。図6の56・57は鹿角半截材で、56が角幹部、57が二又部の半截材である。東海西部地域の縄文時代晩期では、56が根挟み、57が単式釣針という対応関係がほぼ確認できるところである。文書でしか報告のない鹿角製釣針がどのような形状・法量を呈しているのかは今となっては不明であるが、素材と製品の両者が出土しているとするならば、当貝塚(集落)で製作が行われていたということができよう。さらに、鹿角素材から幹や枝を分割した残り部分も出土している(図6の58・59)。58は、1972報告書で「鹿角斧」と報告されている資料の一つである。以前、筆者が確認を行ったところ、蜷塚貝塚や吉胡貝塚で出土している鹿角斧とは加工・使用状況が明らかに異なるため、筆者としては鹿角斧の同定には否定的見解を持っている。しかし、図2の14のように、鹿角枝先端が均等にツブレたような状態の鹿角もあるので、鹿角斧とされている資料の一部には押圧剥離などを行う刺突具が含まれている可能性は極めて高いことを併記しておく。

5 まとめ

骨角器研究では、研究者ごとに取り上げられる器種範囲が異なっているのが現状で、それは各研究方針に基づくことから、絶対的な基準はない。しかし、素材獲得から製作・使用・廃棄(埋納)までの過程を総合して検討する際には、製作関連器種への視座は必須であるといえる。そのためには、今後も同様な方針で、まずは基礎的な資料化作業を随時行うことを、継続した課題として述べておく。

註

註1 埼玉県春日部市神明貝塚では、人骨に着装された状態の軟骨魚類脊椎骨製耳飾りが出土している。この神明貝塚出土資料に関しては、森山高氏から多くのご教示を賜った。

参考文献

鵜飼堅証他編2021『愛知県指定史跡 本刈谷貝塚確認調査報告書』刈谷市

加藤岩蔵・斎藤嘉彦1972『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会

川添和暁2011『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成過程からみた縄文時代晩期—』六一書房

川添和暁2019「東海地方の貝塚に残された副葬品」『身を飾る縄文人』先史文化研究の新展開2、雄山閣、71-88頁

川添和暁2022「枯木宮貝塚 昭和48年調査時出土の骨角製装身具類について」『西尾市史研究』8、西尾市、129-138頁

谷沢靖1972「調査の沿革—文献史料を中心として—」『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会、4-14頁

本稿は、JSPS科研費【課題番号20K01080】基盤研究(C)「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」(研究代表者 川添和暁)の助成を受けたものである。

どの長楕円形を呈した帯状に貝層が存在していたとする推定は、貝塚の構造を考える上で極めて重要な情報である（鵜飼他2021：18頁）。

3 本刈谷貝塚出土骨角器の追加報告

資料は、動物遺存体の中から、加工痕および使用痕の保存が良好で明確な資料のみを抽出した。換言すれば、特に加工関連器種については以下の報告分しか存在していなかったのではなく、明確に確認できたものは以下の資料に留まったということである。本稿では、関連資料も含めて39点を図化した。以下、器種別に報告する（図2～4、表1）。

ヤスもしくは鏃（1～9）

1～8はシカなどの管状骨製と考えられるもので、半截材由来の製品である。1・2は先端部が認められるもの、7・8は基部のみが確認されるもの、3～6は身部片である。2021報告書に記載したように、残存状況で見ると短め資料が主体を占める。9はエイ尾棘をそのまま用いたもので、先端部と基部が欠失している。

根挟み（10～13）

使用時に最も力の掛かる二又部の欠損が著しい。10は二又部の片側が欠失、11は身部のみ残存しているもの、12は二又部が半欠しているもの、13は基部のみである。いずれも鹿角半截材由来の製品である。

刺突具（14）

鹿角枝を非半截状態で用いたものであるが、器面加工時に研磨によって髄が一部露出している状態となっている。使用された端部側は全体が平坦になっており、詳細に見ると平坦面が複数存在する。押圧剥離などの道具であったと考えられる。

ヘラ（15～17）

シカ中手・中足骨を半截して使用されたものである。ここに挙げた3例はいずれも分割の際には材幹部への連続した敲打によるものである。15と17は敲打分割後に使用されたようで、刃部が残存している15では使用痕跡が明瞭である。16は敲打による分割後に研磨調整が施されている。

孔のある軟骨魚類脊椎骨（18～27）

軟骨魚類脊椎骨の中央に孔の認められるものである。ここに挙げた本例は穿孔の大きさに違いはあるものの、いずれも剥がれたような状態のものであった。材の風化により自然に孔が空くことが十分考えられるもので、孔の有無からいうとこの孔が人為的に施されたものであるかどうかは不明である。

一方、広く軟骨魚類脊椎骨製の資料を見ると、錐などで人為的に穿孔されているものは、縄文時代のみならず、西志賀遺跡や朝日遺跡など、確かに存在する。その場合は、孔の内面に回転による線条痕が明瞭に認められるものであり、孔の大きさも比較的大きい傾向にある。

この類いの資料は、垂飾あるいは耳飾りとしての使用が想定されるものである。耳飾りとなっている資料を見ると、側面を加工しているものが多いようである^{註1}が、今後、さらに検討を加えてから再度論じたい。

角座残存部（28～30）

製作関連器種の中で、製作工程において除去された側の器種である。ここでは落角の28・29と非落角の30を示す。このことから分かるように、鹿角加工の素材として、落角と非落角の両方とも使用されていたと考えられる。いずれも第1枝と角幹とで切断が行われたモノで、石器によって打ち込み+折り取りが行われている。

加工痕のある鹿角（31）

鹿角枝の付け根付近で、施溝を巡り、最後に折り取りを実施している。製作関連器種の中で、素材とするために切断したものか、あるいは除去された側のものかは、不明である。

加工された鹿角（32）

鹿角幹を半截状態に加工されたものである。半截などの分割が先か、図面両端の切断が先かはわからないが、石器の打ち込みによる切断が行われている。

加工されたイノシシ雄牙（33）

イノシシ雄犬歯を分割して調整しているもので、製品の一部あるいは加工途上品の可能性が高い。最終調整として全面に研磨が施されている。

加工された骨（34～38）

シカ中手・中足骨を半截・分割したものと考えられる。分割は敲打によるものが多く、38では縦位方向に施溝が認められる。34～36は近位端が付いた状態で、37は両端部がない状態、38はさらに分割が加工が進んだ状態である。34～37はヘラに、38はヤス・鏃などの点状刺突具類に対応するかもしれない。

敲打痕跡のある骨（39）

イノシシ大腿骨の近位端側の幹部を連続した敲打で切断したものである。本例は骨角器ではなく、髓食のために切断された痕跡と考えられる。

[資料紹介]
本刈谷貝塚出土骨角器および関連資料について

川 添 和 暁

1 はじめに

本刈谷貝塚発掘調査報告書が2021年度末に刊行された（鶴飼他2021、以下本稿では「2021報告書」とする）。縄文時代晩期前葉・元刈谷式の標識遺跡として知られる当貝塚において、昭和44年の発掘調査報告書（加藤・斎藤1972、以下本稿では「1972報告書」とする）以来であり、平成13年～15年に調査された成果が公開された、待望の報告書となったのである。

2021報告書では、合計65点の骨角器を報告した。その内訳は、ヤス・鎌・根挟みなどの点状刺突器具類46点、錐などのその他刺突具類5点、ヘラ類5点、鹿角製装身具類（腰飾り）2点、その他鹿角製品2点、貝輪4点・中世以降の資料（筭）1点、であった。但し、加工途上など製作関連器種についての報告ができなかったことから、以降の課題として残すところとなった。

本稿は、上記課題に対する報告と若干の考察を述べて補遺としたい。

2 本刈谷貝塚について

本刈谷貝塚は、刈谷市西端の段丘（碧海面）末端付近に立地する（図1）。当地は、碧海面の西際を南流する境川が現衣浦湾へと流れ込む河口にほど近く、逢妻川や猿渡川が合流する地点にもなっている。標高8～9mを測る当遺跡は、現在は本刈谷神社の社域となっており、遺跡の範囲は5,500㎡に及ぶという。

貝層はハイガイを主体として、マガキ・アカニシなどを含む貝種で構成されている。昭和44年調査では、遺跡北西側の調査が主体で、傾斜地形のところどころに最大50cmほどの層厚の貝層が確認されていたようである。平成13年・14年の調査によって、120×80mの範囲にわたって、幅20mほ

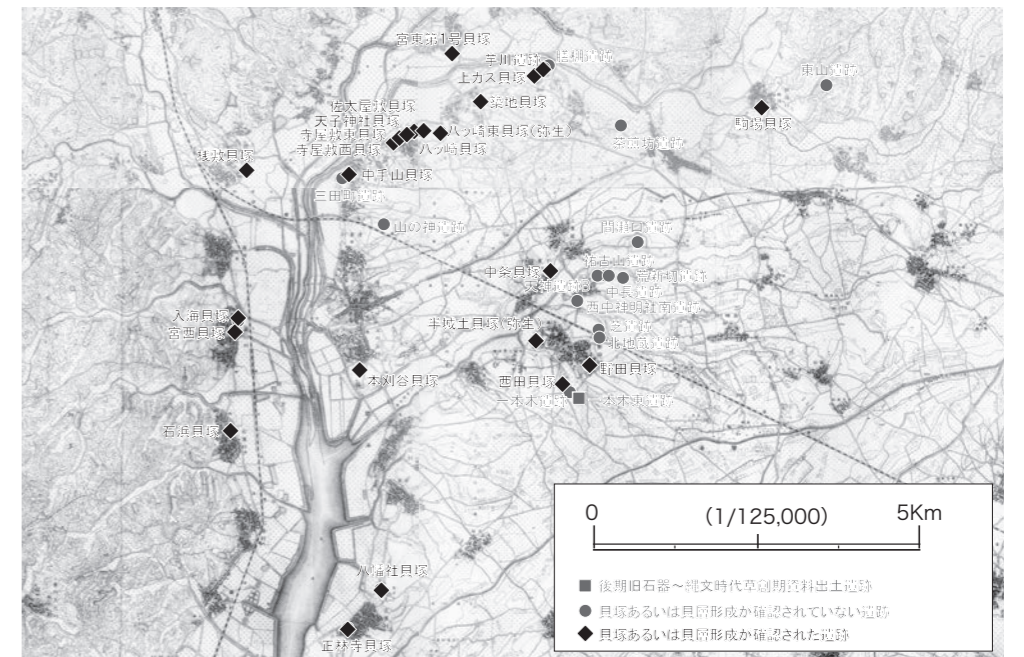
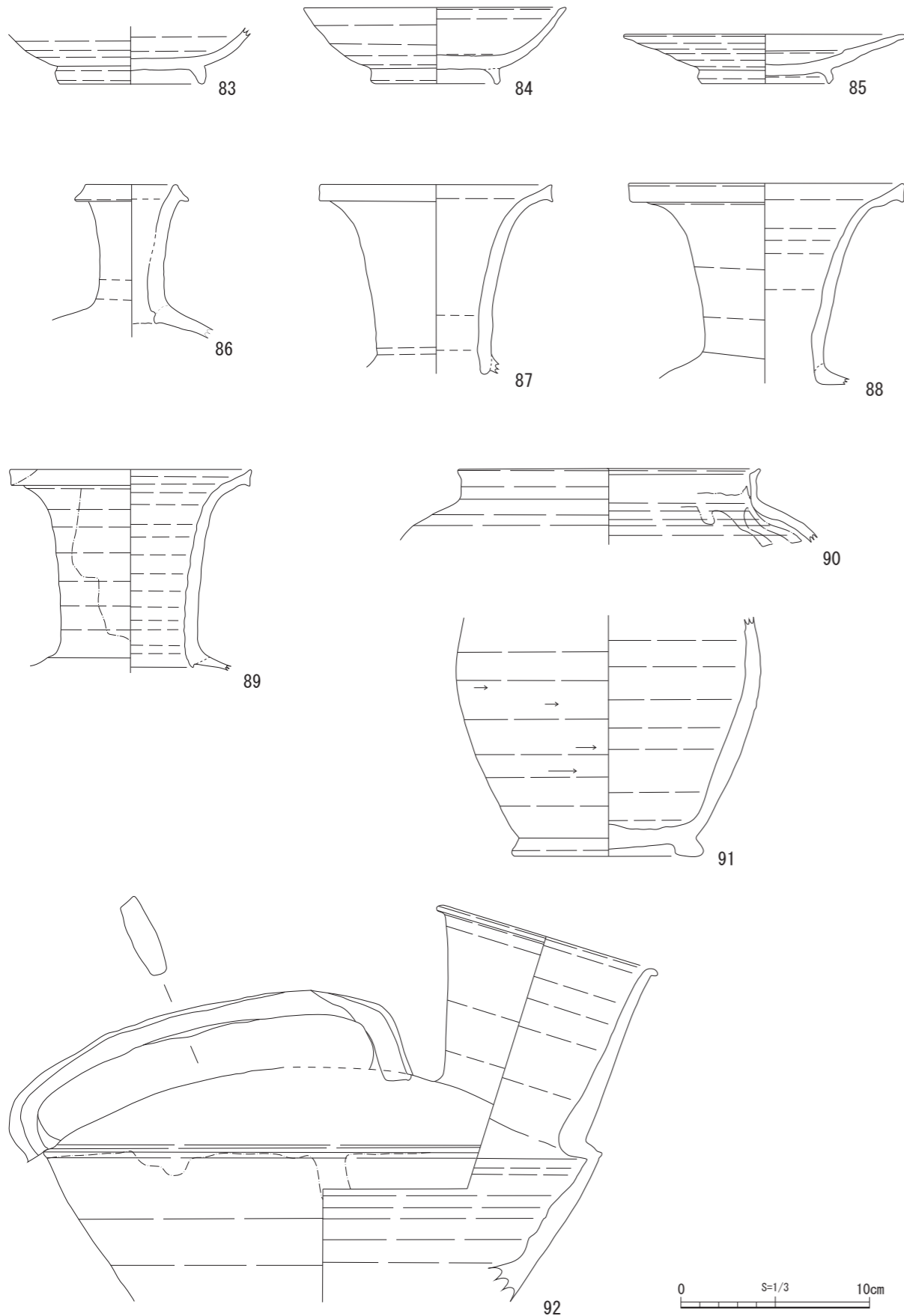
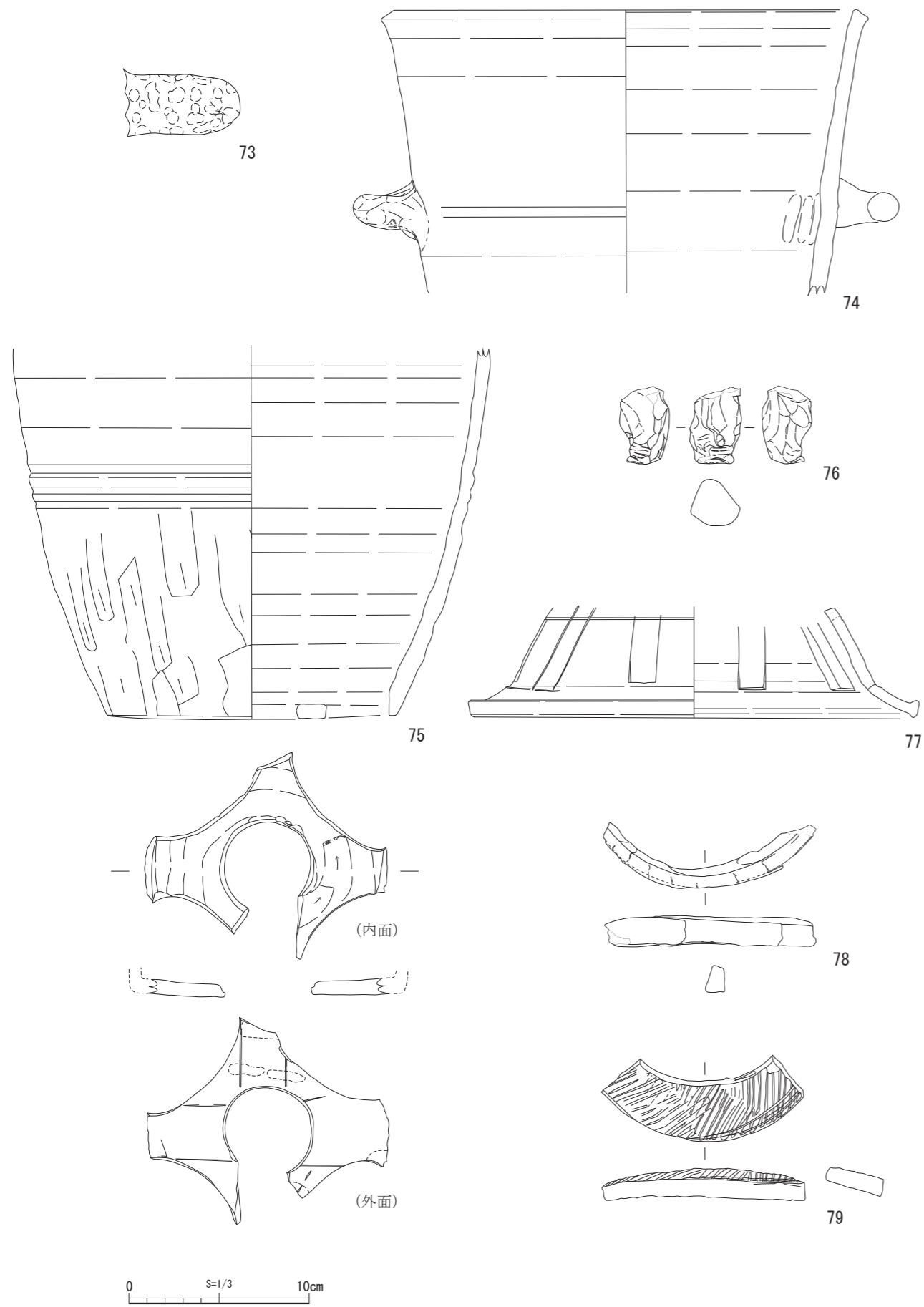


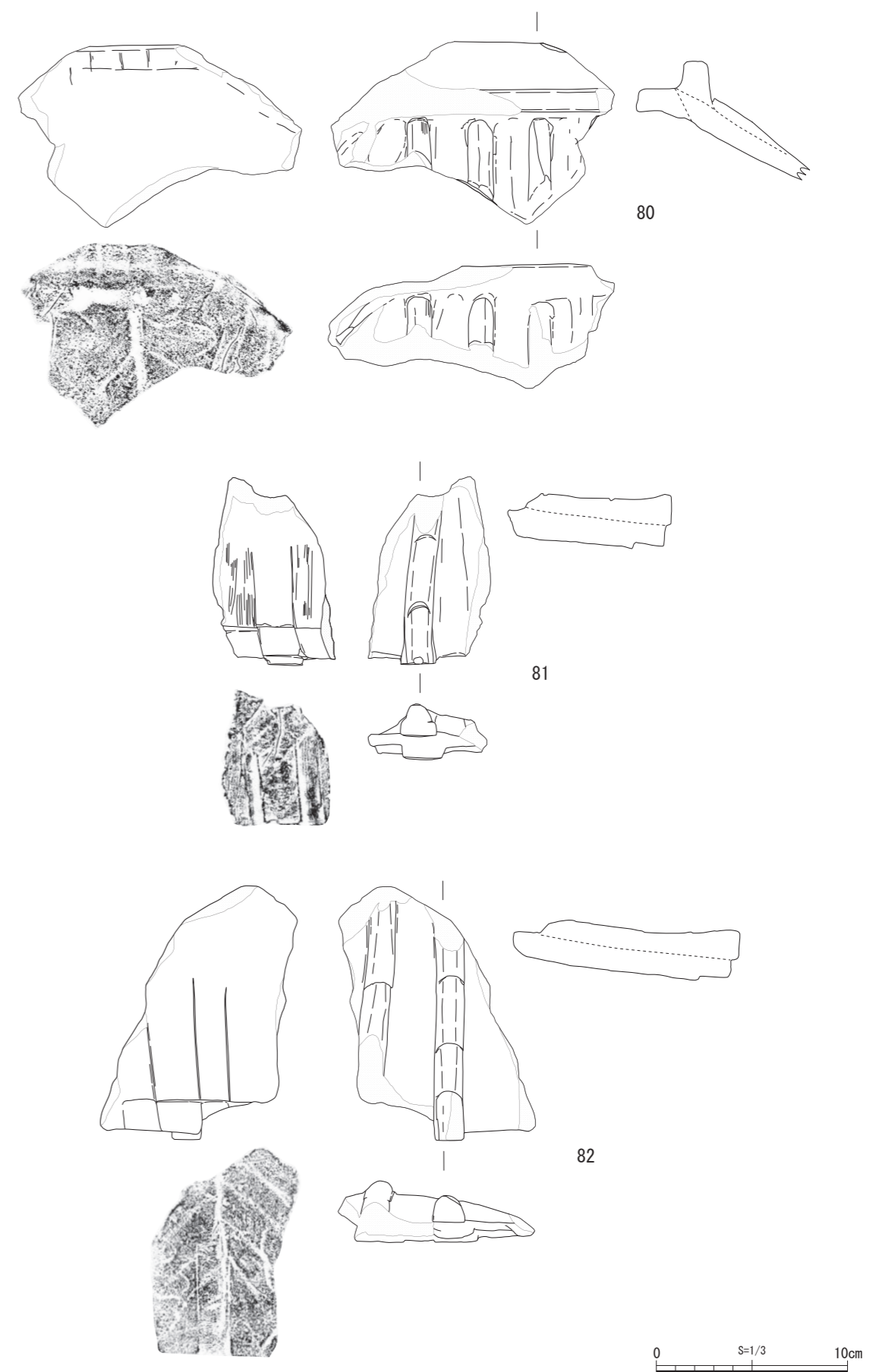
図1 本刈谷貝塚および周辺の縄文・弥生時代遺跡位置図
（旧陸軍地形測量部2万分の1地形図「横須賀町」「大高村」「八幡村」「刈谷町」より）



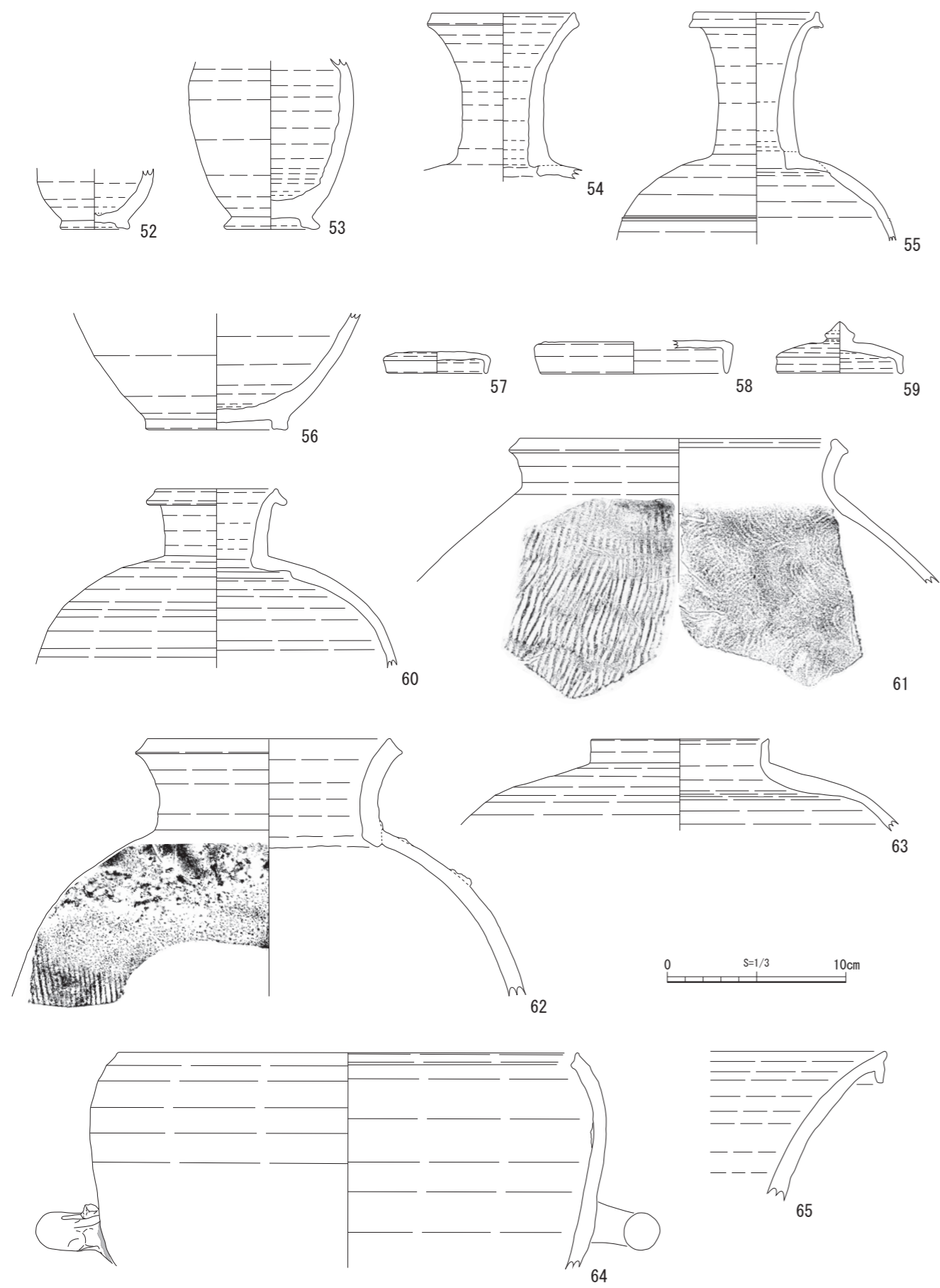
第9図 西石根第7号案 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (8)



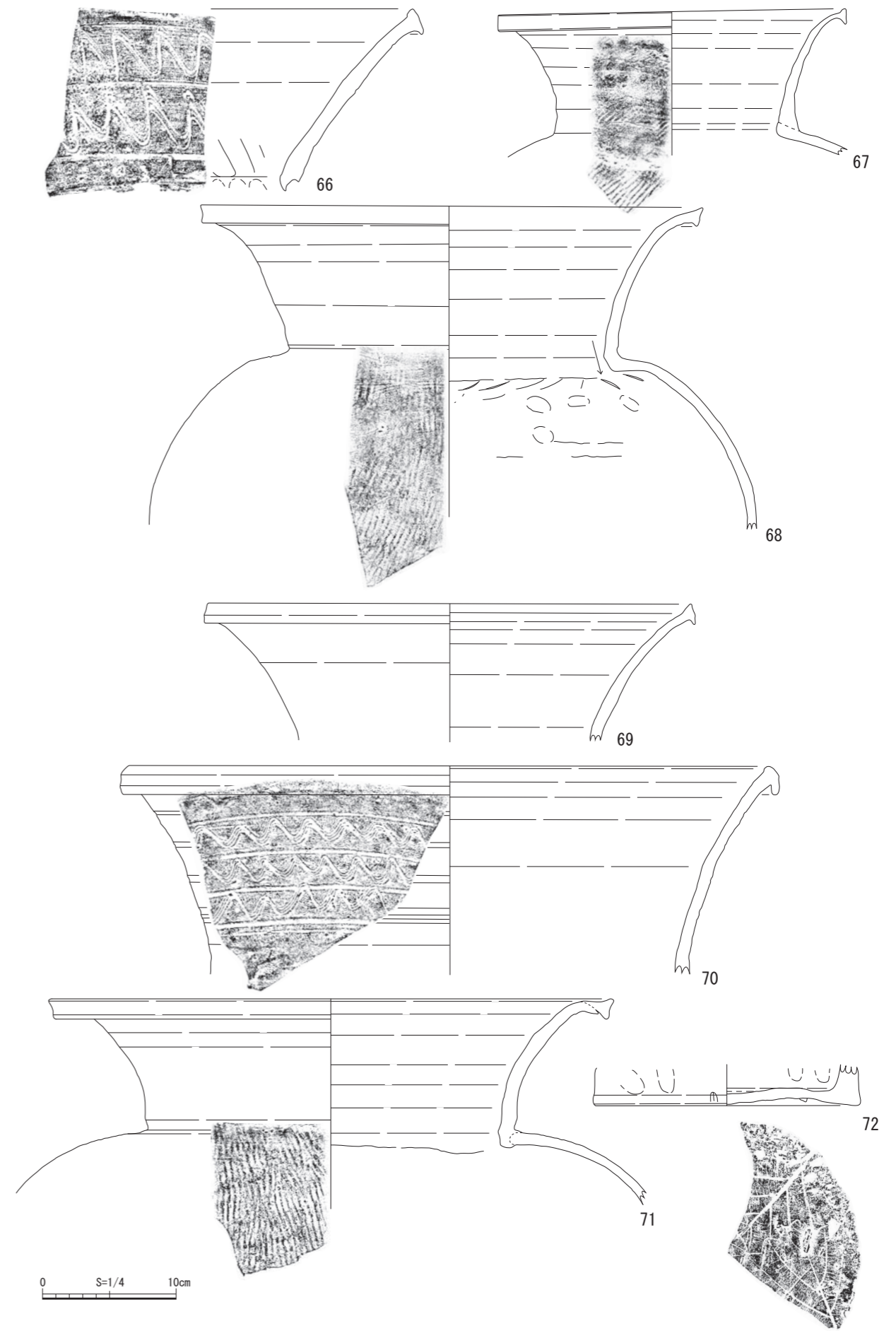
第7図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (6)



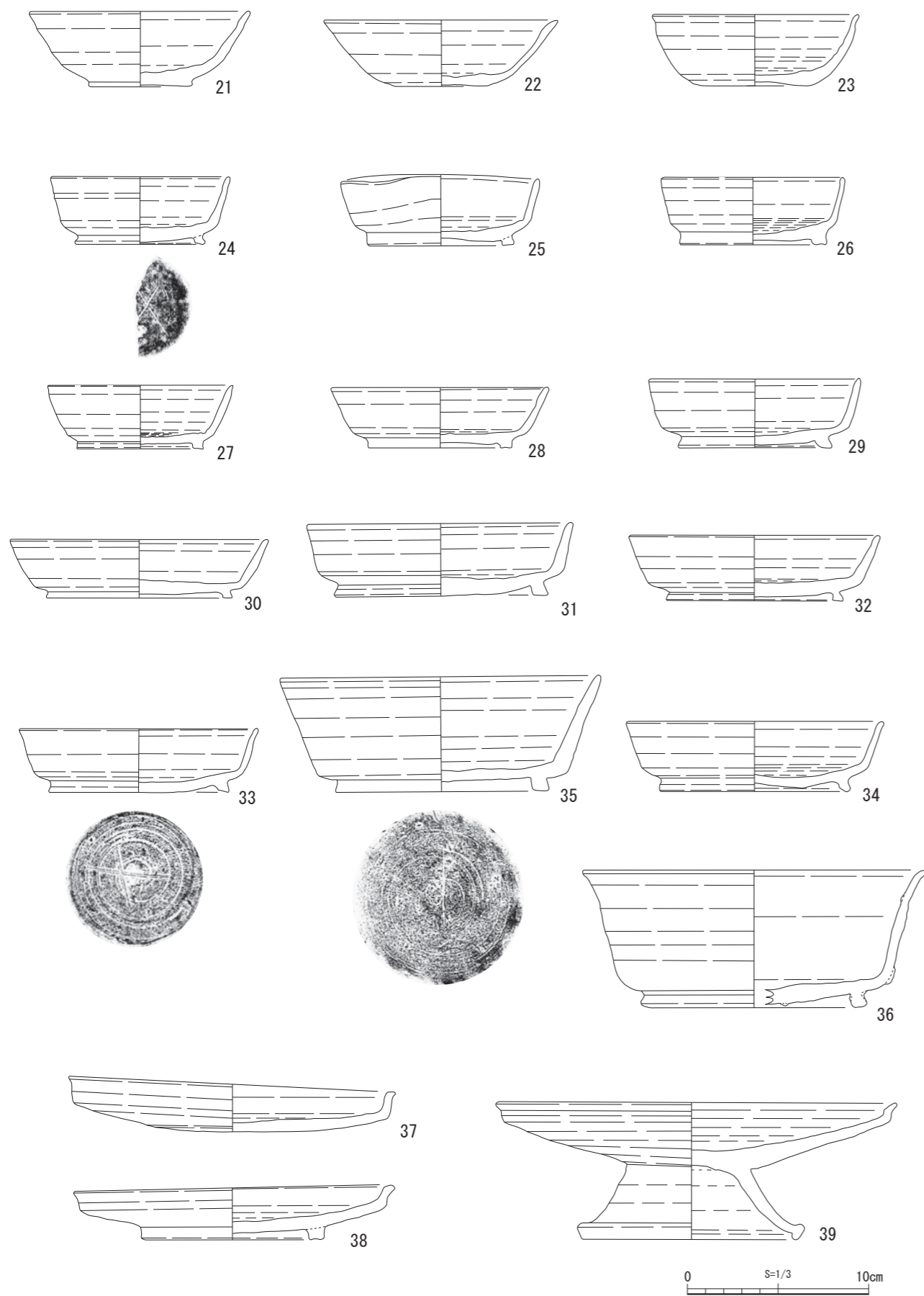
第8図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (7)



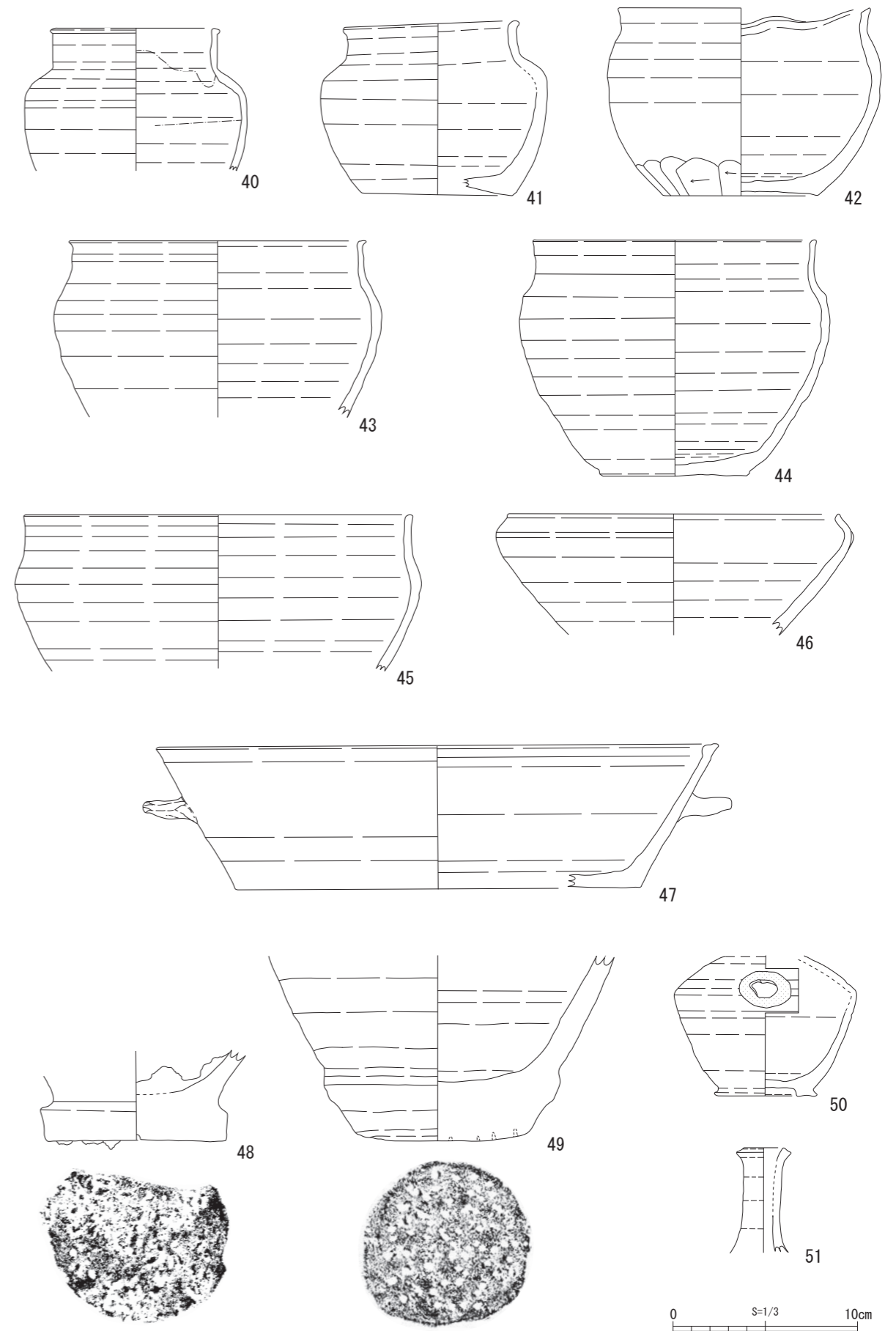
第5図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (4)



第6図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (5)

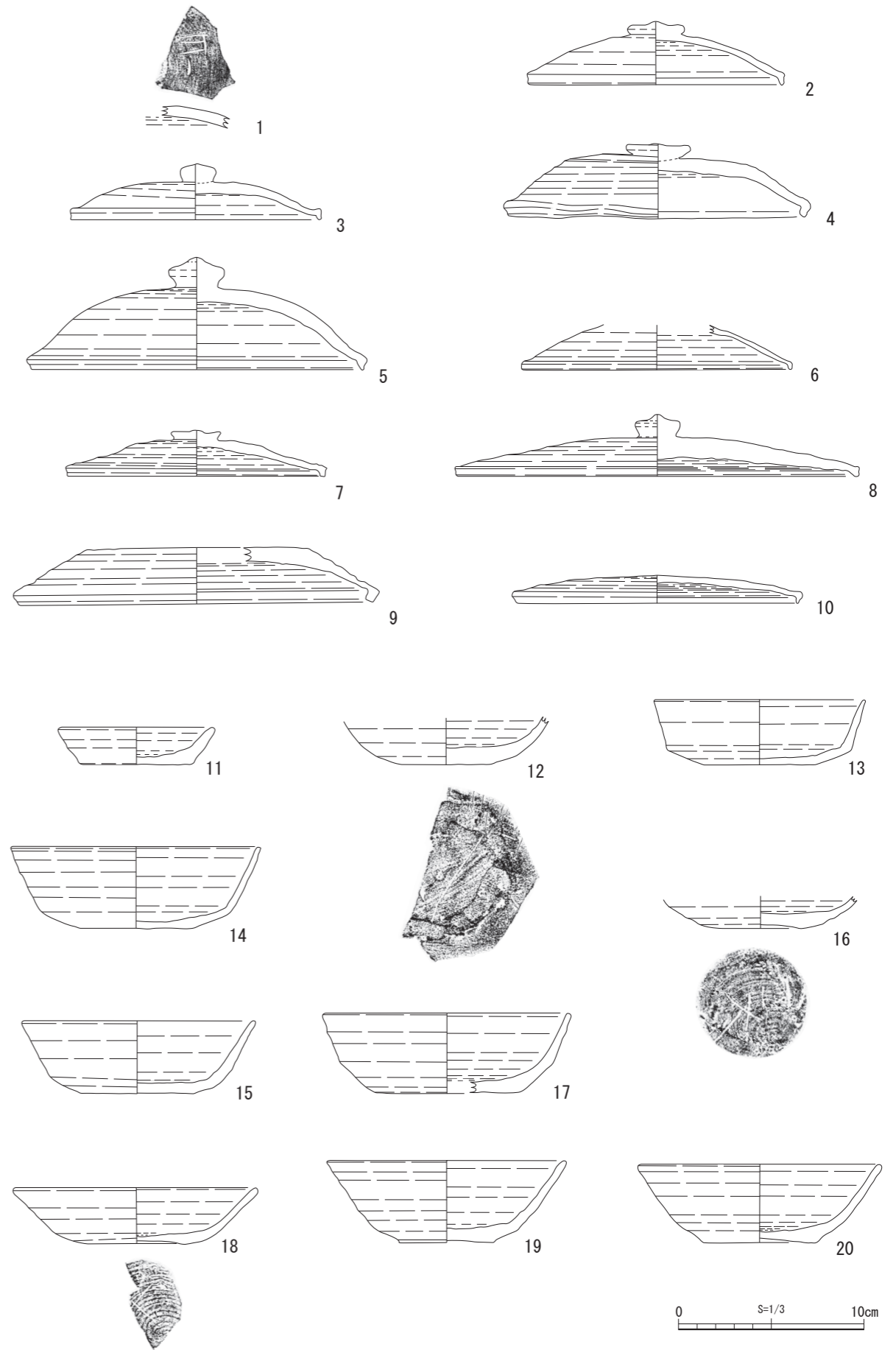


第3図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (2)



第4図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (3)

| 掲載 No | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | | 残存率 (%) | 焼成 | 胎土 | 色調 | 注記 | 備考 |
|----------|------|-----|--------|---------|--------|--------|-----|------------|------|----|--|----------------------------------|-------------------------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底部径 | 高台径 | | | | | | |
| 66 | 須恵器 | 甕 | 口縁部 | - | (13.6) | - | - | 10 | 良好 | 密 | 10YR 7/1 灰白 | k67灰イ-4 | |
| 67 | 須恵器 | 甕 | 口縁~体部 | (25.4) | (10.2) | - | - | 10 | 良好 | 密 | 内:5Y 7/1 灰白 外:N 7/ 灰白 | K-67 灰・K67 | |
| 68 | 須恵器 | 甕 | 口縁~体部 | 27.3 | (24.2) | - | - | 30 | 良好 | 密 | 内:10YR 7/1 灰白 外:10YR 6/2 褐灰 | K67 ト-8 | 外面、刷毛で黄土塗布 |
| 69 | 須恵器 | 甕 | 口縁部 | (36.0) | (10.2) | - | - | 5 | 良好 | 密 | 内:10YR 6/2 灰黄褐 外:5YR 灰 オリーブ | K67灰 ロー-3 | |
| 70 | 須恵器 | 甕 | 口縁部 | (47.8) | (15.5) | - | - | 15 | 良好 | 密 | 内:10YR 6/1 褐灰 外:2.5Y 7/1 灰白 | - | |
| 71 | 須恵器 | 甕 | 口縁~体部 | (48.1) | (15.5) | - | - | 15 | 良好 | 密 | 7.5YR 7/1 明褐灰 | K67 灰 ロー-4 | |
| 72 | 須恵器 | 甕 | 底部 | - | (2.8) | (19.6) | - | 10 | 良好 | 密 | 内:5Y 3/1 オリーブ黒 外:N 7/ 灰白 | | 内面降灰・ボロ付着 底部木葉(柏)痕あり |
| 73 | 須恵器 | 甕 | 把手 | - | - | - | - | 10 | 良好 | 密 | 7.5YR 7/2 明褐灰 | | 指痕多数あり 降灰による自然軸少々あり |
| 74 | 須恵器 | 甕 | 口縁~体部 | (25.5) | (16.8) | - | - | 10 | 生焼け | 密 | 内:10YR8/3浅黄橙~10YR7/2に ぶい黄橙 外:10YR 6/3 ぶい黄橙 | k67 ス-3 | |
| 75 | 須恵器 | 甕 | 底部~体部 | - | (21.2) | 13.7 | - | 15 | やや不良 | 密 | 内:7.5YR 6/3 ぶい褐 外:7.5YR 6/6 橙 | k-67? ロー-8 | |
| 76 | 須恵器 | 甕 | 獣足 | - | - | - | - | - | 良好 | 密 | 10YR 6/4 ぶい黄橙 | | |
| 77 | 須恵器 | 甕 | 円面硯 台部 | - | (24.0) | (6.0) | - | 10 | 良好 | 密 | 内:10YR 5/2 灰黄褐 外:10YR 6/1 褐灰 | K-67 ホ-1 | |
| 78 | 須恵器 | 甕 | 窯道具 | (15.0) | 1.5 | - | - | 25 | 良好 | 密 | 内:10YR 4/1 褐灰 外:10YR 5/1 褐灰 | K-67 チ-1 | |
| 79 | 須恵器 | 甕 | 窯道具 | 外径14.4 | 1.8 | - | - | 30 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 5/2 暗灰黄 外:7.5YR 7/2 明褐灰 | K-67 チ-4 | 内径8.6 |
| 80 | 須恵器 | 瓦塔 | 屋根の一部 | - | - | - | - | - | 不良 | 密 | 5YR 7/6 橙 | K-67 ●-5 | |
| 81 | 須恵器 | 瓦塔 | 屋根の一部 | - | - | - | - | - | 良好 | 密 | 内:5YR 5/3 ぶい赤褐 外:7.5YR 5/2 灰褐 | K-67 ヘ-12 | |
| 82 | 須恵器 | 瓦塔 | 屋根の一部 | - | - | - | - | - | 不良 | 密 | 5YR 7/6 橙 | K-67 ●-5 | |
| 83 | 灰軸陶器 | 椀 | 底部 | - | (2.9) | 6.1 | 7.5 | 42 | 良好 | 密 | 10RY 7/2 ぶい黄橙 | K-67 灰ト-6 | |
| 84 | 灰軸陶器 | 椀 | 口縁~底部 | (13.8) | 4.1 | 4.6 | 6.4 | 70 | 良好 | 密 | 10RY 7/2 ぶい黄橙 | K-67 灰ト-8 | |
| 85 | 灰軸陶器 | 段皿 | 口縁~底部 | 14.7 | 2.6 | 6.7 | - | 90 | 良好 | 密 | 内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:10YR 7/1 灰白 | | 自然軸有り 内面にボロ大量に付着 |
| 86 | 須恵器 | 水瓶 | 口縁~頸部 | 4.7 | (8.1) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:2.5Y 6/1 黄灰 外:2.5Y 7/1 灰白 | K-67 ス-1 | |
| 87 | 灰軸陶器 | 長頸瓶 | 口縁~頸部 | 12.2 | (10) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:7.5Y 6/2 灰オリーブ 外:7.5Y 6/3 オリーブ黄 | K-67 灰ト-6 | |
| 88 | 灰軸陶器 | 長頸瓶 | 口縁~頸部 | (14.4) | (10.4) | - | - | 25 | 良好 | 密 | 内:5Y 6/2 灰オリーブ 外:5Y 7/2 灰白 | K67 K161 | |
| 89 | 灰軸陶器 | 長頸瓶 | 口縁~頸部 | (12.7) | (10.6) | - | - | 30 | 良好 | 密 | 内:7.5Y 7/2 灰白 外:7.5Y 6/3 灰オリーブ | K-67 灰ト-7 | |
| 90 | 灰軸陶器 | 短頸壺 | 口縁部 | 15.8 | (3.9) | - | - | 10 | やや過多 | 密 | 内:10YR 7/1 灰白 外:2.5Y 5/2 暗灰黄 | | 内外面 降灰による自然軸付着 |
| 91 | 灰軸陶器 | 瓶 | 底部~体部 | - | (12.6) | 6.8 | - | 30 | やや良好 | 密 | 10YR 7/2 ぶい黄橙 | k-67灰 ト-8 | |
| 92 | 灰軸陶器 | 平瓶 | 口縁~底部 | 11.4 | (21.4) | - | - | 810 | 良好 | 密 | 内:10YR 7/1 灰白 外:7.5Y 6/2 オリーブ灰 | k67 灰ト-6 K67 灰ヘ-6 K67 K161 | |



第2図 西石根第7号窯 (IG-67) 出土資料 (陶磁美術館所蔵) (1)

第1表 遺物観察表

| 掲載No | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | | 残存率 (%) | 焼成 | 胎土 | 色調 | 注記 | 備考 |
|------|-----|-----|--------|-----------|---------|-------|--------|---------|------|-----|--------------------------------------|--------------|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底部径 | 高台径 | | | | | | |
| 1 | 須恵器 | 蓋 | 体部 | - | - | - | - | 8 | 良好 | 密 | 内:10YR 6/2 灰黄褐 外:5Y 5/1 灰 | k-67灰 ヌ-4 | 器面「山」の刻印 |
| 2 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | 13.4~14.7 | 3.4 | - | - | 99 | 良好 | 密 | 7.5YR 5/3 におい褐 | K-67 灰 | 焼ひずみ大きい |
| 3 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | 13.4 | 3.0 | - | - | 60 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 6/1 黄灰 外:2.5YR 6/2 灰褐 | k67 灰 ト-4 | 外面重ね焼き痕あり |
| 4 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | 15.7 | 4.0 | - | - | 80 | 良好 | 密 | 内:7.5YR 4/1 褐灰 外:7.5YR 6/3 におい褐 | | |
| 5 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | 17.8 | 6.0 | - | - | 80 | 良好 | 密 | 内:10YR 4/1 褐灰 外:2.5YR 6/1 黄灰 | k-67 ハ-3 | 内面に重ね焼き痕あり、降灰天井部火ぶくれしている |
| 6 | 須恵器 | 蓋 | 天井部~口縁 | (14.4) | (2.4) | - | - | 30 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 5/1 黄灰 外:10YR 5/1 褐灰 | | 表面に筆痕あり |
| 7 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | 14.0 | 2.5 | - | - | 80 | 良好 | 密 | 10YR 5/1 褐灰 | K-67 灰 | 焼ひずみ大きい |
| 8 | 須恵器 | 蓋 | 鈕~口縁 | (21.4) | 3.3 | - | - | 30 | 良好 | 密 | 10YR 7/2 におい黄橙 | K-67 灰 ニ-5 | 外面重ね焼き 降灰赤字注記「024」 |
| 9 | 須恵器 | 蓋 | 天井部~口縁 | (19.0) | (12.0) | - | - | 18 | 良好 | 密 | 内:7.5YR 4/1 褐灰 外:7.5YR 4/2 灰褐 | | 外面降灰 |
| 10 | 須恵器 | 蓋 | 天井部~口縁 | 15.0 | 1.5 | - | - | 100 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 4/2 暗灰黄 外:10YR 5/2 灰黄褐 | K-67 チ-4 | 内面に重ね焼きの痕あり 外面自然軸付着、わずかにポロ付着 |
| 11 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | 8.1 | 2.0 | 5.8 | - | 80 | やや良好 | やや密 | 10YR 5/2 灰黄褐 | k-67 ヘ-3 10 | 底部、横方向の手持ちヘラ削り |
| 12 | 須恵器 | 無台杯 | 底部~体部 | - | (2.5) | 4.8 | - | 30 | 良好 | 密 | 内:5Y 4/1 褐灰 外:10YR 5/1 褐灰 | K-67 灰 A区 | 焼ひずみ大きい 内面底部、指頭圧痕あり 外面底部手持ちヘラ削り ヘラ記号あり |
| 13 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (11.2) | 3.5 | (6.0) | - | 23 | 良好 | やや粗 | 内:10YR 5/1 褐灰 外:7.5YR 5/3 におい褐 | k-67 灰 ロ-5 | |
| 14 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (13.2) | 4.4 | 6.0 | - | 45 | やや不良 | 密 | 10YR 6/2 灰黄褐 | k67 | |
| 15 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (12.2) | 3.9 | 6.0 | - | 60 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 5/3 におい褐 外:7.5YR 5/2 灰褐 | K67 灰 ロ-7 | |
| 16 | 須恵器 | 無台杯 | 底部 | - | (1.7) | 4.2 | - | | 良好 | 密 | 内:10YR 4/1 褐灰 外:2.5Y 6/1 黄灰 | K-67ニ-3 | 外面底部にヘラ記号あり |
| 17 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | 13.0~13.8 | 4.3 | (6.0) | (6.9) | 95 | やや良好 | やや密 | 内:7.5YR 6/4 におい橙 外:10YR 6/3 におい黄橙 | K-67 ト-3 | 焼ひずみ大きい 回転糸切り痕 |
| 18 | 須恵器 | 無台杯 | 底部~体部 | (13.0) | 3.0 | (5.0) | - | 40 | 良好 | 密 | 7.5YR 5/1 灰 | K-67 灰 ホ-4 | 回転糸切り痕の静止ヘラ削り ヘラ記号あり |
| 19 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (12.8) | 4.5 | (5.0) | - | 40 | 良好 | 密 | 5YR 5/3 におい赤褐 | K-67 灰 ヘ-6 | 回転糸切り痕 |
| 20 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (12.8) | 4.2 | 6.0 | - | 30 | やや良好 | 密 | 内:10YR 5/2 灰黄褐 外:10YR] 6/2 灰黄褐 | K-67 灰ニ-5 57 | 回転糸切り痕 |
| 21 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (11.9) | 4.1 | (5.5) | - | 20 | 良 | 密 | 5YR 6/6 橙 | K-67 灰 ト-2 | 外面、火だ好きあり 回転糸切り痕 |
| 22 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | (12.8) | 3.6 | 5.0 | - | 72 | 良好 | やや粗 | 内:7.5YR 5/2 褐灰 外:10YR 6/2 灰黄褐 | k-67 灰 ト-6 | 回転糸切り痕 |
| 23 | 須恵器 | 無台杯 | 口縁~底部 | 11.3 | 3.9 | 5.0 | - | 80 | 良好 | 密 | 内:10YR 5/1 褐灰 外: N 5/ 灰 | K-67 灰 ト-7 | 回転糸切り痕 |
| 24 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (9.7) | 3.9 | (6.0) | 7.0 | 30 | 良好 | 密 | 内:10YR 6/1 褐灰 外:2.5Y 5/1 黄灰 | k-67 ヘ-2 | 内面降灰による自然軸付着 貼り付け高台 外面底部にヘラ記号あり |
| 25 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | 9.8~10.8 | 3.7~3.9 | 6.7 | 8.0 | 97 | 良好 | 密 | 内:5YR 4/3 におい赤褐 外:10YR 5/2 灰黄褐 | K-67 灰 | 貼り付け高台 回転糸切り痕 |
| 26 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | 9.9~10.8 | 3.7 | 6.8 | 7.7 | 80 | 良好 | 密 | 7.5YR 5/2 灰褐 | K-67 灰 | 焼ひずみ大きい 貼り付け高台 |
| 27 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (10.1) | 3.5 | (5.8) | (6.9) | 50 | やや良好 | やや密 | 10YR 5/1 褐灰 | k-67 窯内 | 貼り付け高台 |
| 28 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | 10.0~11.4 | 3.3 | 6.5 | 7.9 | 70 | やや良好 | やや密 | 7.5YR 5/2 灰褐 | K-67 灰 | 焼ひずみ大きい 貼り付け高台 |
| 29 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (13.0) | 3.8 | 6.9 | 8.2 | 72 | 良好 | 密 | 7.5YR 6/3 におい褐 | K-67 チ-5 | 貼り付け高台 |
| 30 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (14.3) | 3.3 | (8.8) | (10.2) | 55 | やや不良 | 密 | 内:10YR 7/1 灰白 外:10YR 7/2 におい黄橙 | k67 ホ-5 | |
| 31 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | 14.6 | 3.4 | 9.4 | 11.6 | 96 | やや不良 | 密 | 5YR 6/6 橙 | K-67 ヌ-4 | |
| 32 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (13.6) | 3.6 | (8.5) | (9.7) | 40 | やや不良 | やや密 | 内:5YR 6/4 におい橙 外:7.5YR 6/1 褐灰 | K67窯内 | |

| 掲載No | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | | 残存率 (%) | 焼成 | 胎土 | 色調 | 注記 | 備考 |
|------|-----|------|--------|-----------|--------|--------|--------|---------|------|-----|---|----------------------|--|
| | | | | 口径 | 器高 | 底部径 | 高台径 | | | | | | |
| 33 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (13.0) | 3.5 | 8.6 | 9.8 | 56 | | 密 | 7.5YR 5/2 灰褐 | K-67 ホ-2 | 貼り付け高台 底部外面にヘラ記号あり |
| 34 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | 13.5~14.8 | 3.85 | 9.0 | 10.2 | 100 | 不良 | 密 | 内:5YR 5/3 におい赤褐 外:5YR 3/3 暗赤褐 | K-67 ハ-5 | 焼ひずみ大きい 外面にポロ付着 |
| 35 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (17.6) | 6.3 | 10.1 | 11.7 | 57 | 良好 | 密 | N 5/ 灰 | K-67 窯内 | 焼ひずみあり 底部外面にヘラ記号あり 外面ポロ付着 |
| 36 | 須恵器 | 有台杯 | 口縁~底部 | (18.6) | 7.5 | (10.4) | (11.3) | 40 | 良好 | 密 | N 5/ 灰 | K67 灰 ト-3 | 焼ひずみ・火ぶくれあり 土器全体 (割れ口にも) ポロ付着 |
| 37 | 須恵器 | 無台盤 | 口縁~底部 | (18.0) | 2.6 | 5.0 | - | 30 | 良好 | 密 | 内:7.5YR 5/2 褐灰 外:7.5YR 6/3 におい褐 | k67 | |
| 38 | 須恵器 | 有台盤 | 口縁~底部 | (17.6) | 3.1 | 8.2 | 9.6 | 90 | 不良 | やや密 | 7.5YR 7/4 におい橙 | K-67 リ-3 | 生焼け |
| 39 | 須恵器 | 高盤 | 口縁~底部 | 21.7 | 7.5 | 11.8 | - | 75 | 良 | 密 | 7.5YR 7/6 橙 | K67 キ-3区 | |
| 40 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~体部 | (8.6) | (7.7) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:10YR 4/1 褐灰 外:2.5Y 5/2 暗灰黄 | K-67 ホ-4 | 内・外面自然軸付着 |
| 41 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~底部 | 9.2 | 9.2 | 8.0 | - | 92 | 良好 | 密 | 7.5YR 6/1 褐灰 | k-67 灰 ハ-4 | |
| 42 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~体部 | (13.5) | 10.1 | 8.3 | - | 70 | 良好 | 密 | 2.5YR 4/3 におい赤褐 | k-67 灰 ニ-5 | |
| 43 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~体部 | (15.8) | (9.5) | - | - | 20 | 良 | 密 | 内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 7/1灰-6/3におい黄橙 | k-67 灰 ホ-3 | 外面重ね焼きにより色が違う |
| 44 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~底部 | (15.2) | 12.6 | (7.6) | - | 45 | やや不良 | 密 | 内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 6/1褐灰-7/3におい黄橙 | k-67 ホ-3 | 外面重ね焼きにより色が違う |
| 45 | 須恵器 | 短頸鉢 | 口縁~体部 | (21.0) | (8.5) | - | - | 30 | 良 | 密 | 内:10YR 5/1 褐灰 外:7.5YR 6/1 灰 | k-67 チ-4 | |
| 46 | 須恵器 | 鉄鉢 | 口縁~体部 | (17.8) | (6.5) | - | - | 10 | 良好 | 密 | 内:2.5YR 5/2 灰赤 外:2.5YR 4/6 赤褐 | K-67 ヘ-2 | 外面自然軸付着 |
| 47 | 須恵器 | 大型浅鉢 | 口縁~底部 | (30.0) | 7.7 | (22.0) | - | 30 | 良好 | 密 | 内:7.5YR 5/4 におい褐 外:10YR 6/1 褐灰 | K-67 灰 ヘ-2 | |
| 48 | 須恵器 | 陶臼 | 底部~体部 | - | (5.3) | 9.6 | - | 10 | 良好 | 密 | 7.5YR 4/2 灰オリーブ | K-67 ニ-6 | 土器全体 (割れ口にも) ポロ付着 |
| 49 | 須恵器 | 陶臼 | 底部~体部 | - | (9.9) | 5.5 | - | 30 | 良好 | 密 | 内:2.5Y 7/1 灰白 外:5Y 8/1 灰白 | K-67 ニ-6 | 内面底部付近、黒い軸状の物付着している 外面ポロ付着 |
| 50 | 須恵器 | 甕 | 底部~体部 | - | (7.6) | 3.1 | 3.6 | 80 | 良好 | 密 | 内:2.5Y 5/1 黄灰 外:2.5Y 7/1 灰白 | K-67 ロ-4 | |
| 51 | 須恵器 | 水瓶 | 口縁部 | 2.2 | (6.2) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 7.5YR 3/2 黒褐 | | 外面に大量のポロ付着 割れ口に自然軸付着 |
| 52 | 須恵器 | 瓶 | 底部~体部 | - | (3.4) | 2.2 | 4.0 | 20 | 良好 | 密 | 内:7.5R 2/1 赤黒 外:10R 3/2 暗赤褐 | K-67 | |
| 53 | 須恵器 | 瓶 | 底部~体部 | - | (9.5) | 3.0 | 5.0 | 35 | 良好 | 密 | 内:5R 1.7/1 赤黒 外:10Y 2/1 黒 | K-67 ロ-4 | |
| 54 | 須恵器 | 長頸瓶 | 口縁~頸 | 7.9 | (9.7) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:7.5YR 5/3 におい褐 外:5Y 7/1 灰白 | k-67 ホ-4 061 | |
| 55 | 須恵器 | 長頸瓶 | 口縁~肩部 | 6.8 | (12.8) | - | - | 40 | 良好 | 密 | 内:10YR 3/1 黒褐 外:10YR 6/1 褐灰 | 503 K-67 ハ-3 | 胴部、焼ひずみで破損 |
| 56 | 須恵器 | 長頸瓶 | 底部~体部 | - | 6.5 | 5.9 | 7.8 | 30 | やや不良 | 密 | 内:7.5YR 8/3 浅黄橙 外:7.5YR 7/3 におい橙 | k-67 窯内 | |
| 57 | 須恵器 | 壺蓋 | 天井部~口縁 | 5.9 | 1.3 | - | - | 100 | 良好 | 密 | 2.5YR 7/1 灰白 | | 天井部外面ヘラ削り |
| 58 | 須恵器 | 壺蓋 | 天井部~口縁 | (10.4) | (1.8) | - | - | 35 | 良好 | 粗 | 内:5Y 6/2 灰オリーブ 外:5Y 6/1 灰 | k67 ハ-3 54 | 外面に重ね焼きの痕あり 口縁外側から内面にかけて自然軸付着 |
| 59 | 須恵器 | 壺蓋 | 鈕~口縁 | 7.0 | 2.9 | - | - | 68 | 良好 | 密 | 内:10Y 5/2 オリーブ灰 外:2.5YR 6/1 黄灰 | k67灰 ハ-7 53 | 外面に重ね焼き痕あり 内側、自然軸付着 |
| 60 | 須恵器 | 双耳瓶 | 口縁~胴部 | 6.6 | (10.0) | - | - | 10 | 良好 | 密 | 内:10YR 6/2 灰黄褐 外:5Y 7/2 灰白 | K-67 | 黄土塗布 外面自然軸付着 |
| 61 | 須恵器 | 短頸壺 | 口縁~体部 | (17.5) | (8.0) | - | - | 10 | 良好 | 密 | 7.5YR 6/3 におい褐 | K-68 ヌ-4 | |
| 62 | 須恵器 | 横瓶 | 口縁~体部 | (13.4) | (14.3) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:2.5Y 7/1 灰白 外:2.5Y 3/1 黒褐 | K-67 チ-1 | 焼ひずみ大きい 土器全体(割れ口も)大量のポロ付着 口縁自然軸付着 (黒褐) |
| 63 | 須恵器 | 短頸壺 | 口縁~体部 | 10.0 | (4.2) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:2.5Y 5/1 黄灰 外:2.5Y 7/1 灰白 | K-67 リ-2 K-67 リ-5 | |
| 64 | 須恵器 | 把手付鍋 | 口縁~体部 | (25.6) | (10.2) | - | - | 15 | 良好 | 密 | 5Y 6/1 灰 | K67 灰 | 土器全体 (割れ口も) ポロ付着 |
| 65 | 須恵器 | 甕 | 口縁部 | - | (10.7) | - | - | 20 | 良好 | 密 | 内:10YR 7/3 におい黄橙 外:5YR 4/4 におい赤褐 | k67灰イ-4 | 内外面、刷毛で黄土塗布 |

(16) 灰釉陶器（第9図83～92）

83・84は椀である。底部はヘラ削りを施し、内面には両方とも重ね焼き痕がみられる。また、内面は刷毛塗りを施している。

85は段皿で、底部はヘラ削りを施し、内面全面施釉である。内面には大量のボロが付着している。体部外面にはハケの痕跡が確認できる。

86～89は長頸瓶である。86は縁帯を下に摘み出している。口頸部外面に刷毛塗りが確認できる。87～89は口頸部内外面ともに釉薬が確認できる。縁帯幅は3点ともほぼ同じ幅である。

90は短頸壺の口縁部で、口縁端部に面を持っている。内外面に釉薬が確認できる。

91は瓶の底部～体部で、やや焼成不良である。底部、体部下半はヘラ削りを施している。

92は平瓶で体部上面、把手上面に釉薬が確認できる。把手の部分が焼きひずみ、接合できない状態になっている。

おわりに

陶磁美術館所蔵の西石根第7号窯の資料は、谷沢資料で確認できなかった大型の平瓶や陶塔などの特殊品を整理することができた。

西石根第7号窯の時期については、甕が出土していること、甕の口縁の形状からI-25号窯式期～NN-32号窯式期、尾野編年の5A期（尾野2022）と考えられる。

また、陶磁美術館の西石根第7号窯の資料内にもいくつか灰釉陶器が含まれており、これらの灰釉陶器はいずれもK-90号窯式期のものであることから、谷沢資料と同様に、近くにあるとされる西石根第10号窯の遺物が混入していると考えられる（河野2021）^{註3}。

今後も引き続き井ヶ谷古窯跡群の資料について調査、整理、検討を行っていきたい。

追記 令和4年11月21日京都国立博物館において尾野氏にご教示いただき、60番を双耳瓶、62番を横瓶に変更したが、原稿の都合上（10）の瓶類に含まれていない。また、86番は器形から須恵器に含まれ、54番と55番の間に含まれるが、原稿の都合上変更できなかったため、灰釉陶器の図面に含まれている。

註

註1 『刈谷市史』第5巻によると、「井ヶ谷地区には77基の古窯跡が知られている」とあるが、表中の窯数が76基であること、愛知県教育委員会刊行の『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（I）』（梶崎1980）に掲載されているIG番号の窯も76基であることから、刈谷市史編纂時に数え間違えている可能性が高い。そのため今回の記述から76基とする。

註2 尾野善裕氏の教示による。

註3 西石根第10号窯の時期については、『愛知県史 別編古代猿投系』（城ヶ谷2015）にもある通り、K-90号窯式期であると考えられる。谷沢資料に含まれていた灰釉陶器も同様の時期と考えられる（河野2021）。

謝辞

本稿を草するにあたり、京都国立博物館尾野善裕氏、愛知県埋蔵文化財センター永井邦仁氏、愛知県陶磁美術館大西遼氏にご教示いただきました。また整理作業にあたって浅井飛音氏、岩垂例央氏、大平悠希氏、寺井崇浩氏、張睿帆氏、陳永強氏、張温舒芸氏、水野領介氏、山田美咲氏、浅井敏美氏、神谷泰子氏、佐藤輝子氏、嶋村京美氏、脇田小百合氏、藤巻悦子氏、白井まりや氏にご協力いただきました。末尾ながら感謝いたします。

参考・引用文献

愛知教育大学1970『井ヶ谷古窯址群』愛知教育大学用地関係古窯調査報告

梶崎彰一1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（I）』愛知県教育委員会

斎藤孝正1987「猿投窯IV期における須恵器生産の様相」『名古屋大学文学部研究論集』XCVⅢ（史学33）名古屋大学文学部

刈谷市史編さん編集委員会1989『刈谷市史』第五巻 資料（自然・考古）

斎藤嘉彦1989『増補井ヶ谷古窯址群 愛知教育大学所蔵考古資料調査報告』愛知教育大学

杉浦知1997『刈谷の考古資料図録—谷沢靖氏寄贈資料Ⅱ—』刈谷市教育委員会

城ヶ谷和広2015「西石根第7号窯」『愛知県史 別編古代猿投系』愛知県史編さん委員会

大西遼2018『知られざる古代の名陶 猿投窯』愛知県陶磁美術館

河野あすか2021「西石根第7号窯（IG-67）の須恵器、灰釉陶器」『刈谷市歴史博物館研究紀要』第1号 令和2年度

尾野善裕2022「猿投系須恵器編年の再編と下り松瓦窯の操業年代—須恵器から見た西三河の鋸歯文縁複弁六葉蓮華文軒丸瓦—」『伊保廃寺発掘調査報告書』名古屋大学大学院人文研究科考古学研究室

16～23は無台椀である。底部には全て糸切り痕が認められる。16は底部に「大」、18は「十」というヘラ記号が確認できる。21は糸切痕により底部がわずかに突出している。他の無台椀に比べ体部の色が褐色で、火だすきのような痕が体部外面にみられる。23は他の無台椀に比べ体部が丸く、口縁部も外側に折り返している。

(4) 有台杯 (第3図24～36)

24～36は有台杯である。24は底部に「×」の刻書がみられる。25・28は外面上部に重ね焼きによる胎土の変色がみられる。また、25は焼きひずみ大きい。30はわずかに焼成不良である。31は他の有台杯に比べて褐色である。34は31ほど褐色ではないが、暗褐色を呈している。外面にはボロが付着し、焼きひずみも大きい。35・36は器高が高く、他の有台杯より深い。36は口縁部を折り返している。

(5) 盤 (第3図37・38)

37は無台盤、38は有台盤である。全て口縁端部を折り返し、面を持っている。37・38とも底部に回転ヘラ削りを施している。

(6) 高盤 (第3図39)

39は高盤である。底部～口縁部にかけて3分の2ほど回転ヘラ削りを施している。

(7) 短頸鉢・鉄鉢・大型浅鉢 (第4図40～47)

40～45は短頸鉢である。40は内外面に自然釉がかかり、口縁端部に面を持っている。41は口縁部を丸く仕上げ、底部には糸切り痕が確認できる。42は口縁部が40・41に比べ薄い。焼きひずんでいる。底部は糸切り痕が残り、底部付近は手持ちヘラ削りが確認できる。43・44は底部付近に体部の色の違いが確認でき、重ね焼きを行ったことが分かる。44は底部に糸切り痕を施す。45は他の短頸鉢に比べて肩が張らず、体部にかけて直立している。

46は鉄鉢である。体部外面に体部から口縁部にかけて自然釉が流れている。そのため、反対向きで焼成したと考えられる。

47は把手付の大型浅鉢である。底部の残存している部分には回転ヘラ削りが確認できる。体部外面は底部から口縁部付近まで回転ヘラ削り後ナデを行っていると考えられる。内外面ともに自然釉、ボロの付着がみられる。

(8) 陶臼 (第4図48・49)

48・49は陶臼である。ともに底部はランダムに刺突が行われている。48は内外面にボロ、自然釉が付着している。49は底部内面に黒色に変化した黄土が付着している。これは器内で鬼板(褐色鉢)を砕いて粉末状にし、それを水で溶いて黄土を作り、甕などに塗布する際にパレットとして使用した痕跡と考えられる。底部外面にも降灰が確認できることや、黄土が釉化していることから、黄土の塗布に使用された後、窯道具に転用され窯内で焼成された(被熱した)可能性がある^{註2}。

(9) 甕・水瓶 (第4図50・51)

50は甕である。肩がやや張り、注口部は欠損するがやや上向きになっている。51は水瓶である。体部外面に自然釉、ボロの付着がみられる。

(10) 瓶類 (第5図52～56)

52は瓶類の底部で、かなり小型であるため、水瓶または浄瓶の底部と考えられる。高台に自然釉、ボロの付着がみられる。53は体部外面に黒色の自然釉が付着している。また、底部内面にもわずかに自然釉が確認できる。底部、高台部分にボロの付着がみられる。

54は長頸瓶の口縁部～頸部で欠損しているが、三段構成と考えられる。口縁部内部、口縁部外面～体部外面にかけて自然釉が付着している。55は長頸瓶で口縁部～体部上部まで残存する。頸部、体部内面に釉薬が付着している。三段構成である。体部上部に2本の沈線を巡らしている。

(11) 壺蓋 (第5図57～59)

57～59は壺蓋である。57は上部をヘラ削りしている。口縁部の内外面に自然釉が付着している。上部には重ね焼き痕が確認できる。鈕は欠損している可能性がある。59は上部外面3分の2ほど回転ヘラ削りを施す。鈕付近のみナデを行っている。58と同様、上部外面に重ね焼き痕がみられる。内面は全面に自然釉が付着している。

(12) 双耳瓶・横瓶・壺・短頸壺 (第5図60～63)

60は双耳瓶で外面に自然釉が付着している。縁帯部下端が垂れ下がっている。61は短頸壺で縁帯部下端を下に摘み出し、上端が上に摘みあげられている。体部外面にはタタキ目がみられ、内面には青海波文がみられる。

62は横瓶の口縁部～体部で、体部外面にタタキ目がみられる。外面には自然釉、ボロが付着している。口縁部外面、体部内面に黄土かなにかを塗っている様子が確認できる。

63は短頸壺で、口縁端部に面をもつ。

(13) 鍋・甕 (第5図64・65、第6図66～72)

64は把手付の鍋で把手の部分にはボロが付着している。口縁部を内面に折り曲げている。体部内面にも自然釉、ボロが付着している。65～71は甕であり、66・70は外面に櫛描波状文が施されている。67・68・71は体部にタタキ目が確認できる。65は甕の口縁部で、縁帯下端は垂れ下がっている。内外面ともに黄土を刷毛塗りしている。67は口頸部にもタタキ目が確認できる。69は口頸部に釉薬がべったり付着している。71は口頸部、内面に黄土を刷毛塗りしている。72は甕の底部で、底部外面に葉脈痕が確認できる。

(14) 甌 (第7図73～75)

73は甌の把手である。指痕がいくつか確認できる。74、75は甌の体部、底部～体部である。74はやや焼成不良である。75は体部に2本の沈線が巡る。体部外面は全体的に刷毛目がみられる。

(15) その他 (第7図76～79、第8図80～82)

76は獣足で外面に自然釉が付着している。胎土は他の遺物に比べ緻密で黒斑混じりの白い胎土である。

77は円面硯で4方向に透かしをもつと考えられる。1か所は体部に切れ込みのみ確認できる。78・79は窯道具であるが、詳細は不明である。79は上部にタタキ目と思われる痕がみられる。

80～82は瓦塔である。80・82は裏面に葉脈痕がみられる。81のみ焼成良好であるが、それ以外は褐色の焼成不良である。

【研究ノート】

西石根第7号窯 (IG-67) の須恵器、灰釉陶器

—愛知県陶磁美術館所蔵の資料から—

河野 あすか

はじめに

刈谷市の北部、豊田市の南西部には古代から中世にかけての古窯が76基^{註1}存在し、井ヶ谷古窯群と呼ばれている。そのうち31基が刈谷市の指定史跡となっている（本稿執筆時点）。井ヶ谷町の洲原池・大池・広沢池・牛池の周辺に分布し、碧海台地より古く、一段高い挙母台地に広がっている。この地域は瀬戸陶土層に連なる良質な粘土を含んでいる。井ヶ谷窯の最も古い時期の窯は8世紀後半で、9世紀前半頃に最盛期を迎え、9世紀後半から11世紀にかけて衰退していったとされる。

今回紹介する西石根第7号窯 (IG-67) は井ヶ谷窯最古期に位置付けられており、その出土品は現在愛知県陶磁美術館（以下 陶磁美術館）と刈谷市歴史博物館に保管されている。陶磁美術館に保管されている資料については、愛知用水関連の資料として保管されており、刈谷市歴史博物館に保管されている資料は、刈谷高校の教諭であった谷沢靖氏によって採集された資料（以下 谷沢資料）である。令和2年度刊行の『刈谷市歴史博物館研究紀要』ではこの谷沢資料について整理、検討を行い、西石根第7号窯の資料に西石根第10号窯 (IG-61) の資料が混ざりこんでいることを確認した（河野2021）。

本稿では、陶磁美術館所蔵の西石根第7号窯の資料について整理・検討を行い、その成果を報告する。

1 概要

西石根第7号窯は、井ヶ谷地区北端のほぼ黒笹地区と接するところに位置し、刈谷市の指定史跡となっている。窯体は境川の支流である茶屋川の南約300mに所在し、平野に張り出した低位丘陵の先端付近の北西向き斜面に構築されている。標高は約30mである。西石根第7号窯の南西には平安時代の窯とされる西石根第10号窯が位置する（第1図）。



第1図 西石根第7号窯 第10号窯の位置図

窯体は半地下式の窖窯で、床面はほぼ完存していた。全長は7.4m、最大幅は約1.7mである。平面形は寸胴であるが、焼成部中央部付近がやや胴張りとなる。床面傾斜角は焼成部前半部で約20度であるが、奥壁の手前約2.2mの所で傾斜が変わり、約30度と急になる。奥壁は丸みをもっており、30cmほど立ち上がり、煙道部へと続く。舟底ピットがあったかどうかは確認されていない（城ヶ谷2015）。

2 過去の調査・報告

昭和35年（1960）に名古屋大学により発掘調査が行われ、窯体と灰原が検出されている。愛知教育大学発行の『井ヶ谷古窯址群』（愛知教育大学1970）によると、昭和42～44年の調査で、西石根7号窯は、「盗掘により窯壁の一部露出 遺物散布」という記述がある。刈谷市教育委員会が昭和53年（1978）に分布調査を行った際にも盗掘による穴がいくつか確認されている。その後発行された『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書』（檜崎1980）には窯体は残存していると記述がある。

これらの記述や陶磁美術館で保管されている遺物の量の多さを考えると、名古屋大学の発掘調査から愛知教育大学の調査までの約10年間に盗掘されたというよりは、名古屋大学の発掘調査の痕跡を後の踏査で盗掘としている可能性がある（河野2021）。

令和3年（2021）井ヶ谷古窯跡群分布調査を行い、現地を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

3 出土遺物（第2図～第9図、第1表）

刈谷市に収蔵されている谷沢資料の西石根第7号窯の遺物は、須恵器の無台碗や有台杯などの供膳具がほとんどであった。また、西石根第10号窯の混ざりこみも確認できた（河野2021）。

陶磁美術館に収蔵されている出土品は、膨大な量があるが、今回須恵器82点と灰釉陶器10点を図化した。器種については第1表のとおりである。（1）杯蓋から（15）その他まで須恵器、（16）を灰釉陶器として報告する。灰釉陶器については、南西側の西石根第10号窯 (IG-61) の遺物を採集していると考えられるため、西石根第10号窯の遺物として器種を一括で記述する。

（1）杯蓋（第2図1～10）

1～10は杯蓋で、3・5・8は高い宝珠鈕、2には低い宝珠鈕、4・7には扁平鈕がつく。9は鈕が欠損している可能性があり、10には鈕がついておらず、扁平な形をしている。1は上部に「山」のような刻書がみられる。3～5、7・8は上部の口縁部付近に色の違いがみられ、重ね焼きをしたと考えられる。

（2）無台杯（第2図11～15）

11～15は無台杯で、11・12は底部にヘラ削り、13～15は底部に回転ヘラ削りを施す。12は底部に「-」のヘラ記号が認められる。体部から口縁部にかけては直線的に立ち上がるものが多い。

（3）無台碗（第2図16～20、第3図21～23）

出前講座は、広く市民に向け開講されており、学芸員による専門性の高いプログラムが用意されているが、アウトリーチプログラムは、学芸員の専門性を生かした出前講座とは別に小学校6年生の社会科の授業を対象にしており、学校からの依頼により、学芸員の支援を受けながら、指導主事が授業づくりに参加する。

小学校では、社会科が専門ではない教員も多く、歴史の学習に苦手感を抱いている教員が多い。その上日々の授業の中で社会科の教材研究にだけ多くの時間を割くことも難しいため、地域の歴史を掘り起こして学習を展開することは困難である。さらに学芸員を招聘して授業を展開すると、さらにハードルが上がってしまう教員も多いのが現状である。教員の中には地域の資料を使って授業をしたいという思いはある。そこを指導主事がつなぐことができると考えた。

具体的には、博物館の資料等で持ち出し可能なものを指導主事が学校へ持って行き、1時間の授業を行うというものである。指導主事の授業は主に単元の導入で、子どもたちの興味を引くような地域資料を持参する。この授業で子どもの興味関心を高め、授業を深めていく。この流れを事前に授業者と打ち合わせし、必要に応じて授業者をサポートしてく。授業者と協働した授業づくりである。



写真4 アウトリーチプログラムの様子

今年度は、刈谷市教育研究会等で周知を図り、数校から実施の問い合わせがあり、3校は実施済みである(写真4)。

単元「戦時下の暮らし」では、1時間の学習内容として、千人針の実物を見せると、「虎の絵が見える」「武運長久って書かれている」と声が上がリ、これは絵ではなく、玉留めを作ることで虎の絵を作っていることを紹介すると、「ほんとだ、点々になっている」「すごく大変そう」と多くの声が上がった。自分の学校の記念誌に書かれた内容や実物を見せると、子どもたちの集中力が高まり、授業に入り込んでいる様子がよく分かる。感想からも、戦争が別の地域の特別な出来事ではなく、地域にある歴史の一部であることを認識し、身近に感じていることが読み取れる(資料4)。

資料4 児童の感想

戦争について教えていただきありがとうございました。当時は戦争を中心に生活をしていたので、すごく苦しくて大変だと分かりました。〇〇小学校でも戦争のために授業をしている写真を見たので、身近なものに感じました。戦争では家族や先生が戦地に行ってしまうときに虎がいる布を渡してメッセージを伝えていたのでとても大切なものと分かりました。これからも歴史について調べていきたいです。そして、戦争が起こらないようにするにはどうしたらいいかも考えたいです。

プログラムを利用した教員の感想からも実物資料の効果について実感していただけた。小学校では若年層の教員も多いため、指導主事が行う授業1時間の参観が、自分の授業への糧になる事も感じられた(資料5)。この取り組みは、授業づくり以外の効果も期待できる。博物館が所蔵する資

資料5 アウトリーチプログラムを利用した教員の感想

・私自身、戦争、平和への思いの「伝え方」が勉強になりました。「話し方、語り方、伝え方」が勉強になりました。子どもたちに疑問を抱かせる話し方、戦争や平和についての語り方、興味を引きつける資料提示、言葉かけ等の伝え方を参考にしていきたいと感じました。来年以降も利用していきたいです。

・博物館所蔵のものを見せていただけてよかったです。歴史をよく知っている先生にお話ししてもらえると理解や関心も深まり、子どもたちにとてもよいと思います。

料に教室で出合うことで、博物館の存在を知ってもらい、中1見学へつなげていくことができる。また、教員には子どもたちと一緒に授業に参加することで、博物館を利活用する方法や資料提示の方法について学んでもらうこともできる。

今後も自主研や刈教研社会科部の集まりの機会を使ってアウトリーチプログラムについて広報活動を粘り強く続けていきたい。

4 おわりに

ある統計によると、学校連携を担当する博物館職員が配置されている博物館等施設は全体の4割程度とされている。その中に現職の教員が配置されている施設は3割程度である(2)。当館は開館以来、指導主事を配置し、博学連携を推進する博物館として様々な取り組みを行っている。ウィズコロナとなった今、博学連携の方法を今一度見直し、学芸員や博物館側が一方向的にプログラムを提示するだけでなく、学校現場に寄り添い、教員と協働しながら子どもたちの豊かな学びが保障できるよう努力を続けていきたい。そのためには、教員に博物館の良さを知ってもらい、博物館を気軽に利用できるプログラムが必要である。学芸員がもつ豊富な知識と、博物館の資料を最大限に活用し、学校の教員が日々の授業に生かすことができるよう工夫することが「つなぐシステム」としての指導主事の役割であると考えている。

本稿で紹介した3つの実践はまだスタートしたばかりである。(1)(2)の実践では、1クラスずつ受け入れる見学方法は一見すると博物館側の負担が増加しているように感じられるが、役割分担を明確にし、連携を強化することで子どもたちの学びを確かなものに行っていると実感できている。(1)で示した市内中1見学は来年度以降、より学芸員の専門性を生かした講話をすることも検討している。常に学校との風通しを良くし、意見を交流していくことで相互の理解を進め、理念を共有していきながら協働の取り組みを深めていく中で、博物館が価値ある学びの場となるよう努力を進めていきたい。

参考文献および資料

- (1)『協働する博物館 博学連携の充実に向けて』小川義和編著 ジダイ社 2019年
- (2)「令和元年度 日本の博物館総合調査報告書」公益財団法人日本博物館協会 令和2年9月1日

・私自身初めての歴史博物館でしたが、とても学ぶことが多く、充実した見学となりました。話を聞いた後の展示室はより魅力的で時間がとても足りませんでした。生徒たちは「もっと見たいからまた一緒に行こうよ!」と話している姿がありました。

(2) 市内小学校3年生郷土資料館見学

刈谷市には、開館3年を過ぎた歴史博物館と、昭和55年に開館した郷土資料館がある。現在は歴史博物館と役割を分担し、郷土資料館は、主に民具や農機具を展示する資料館としての役割を担っている。ここでは、小学校3年生社会科の大単元「くらしのうつりかわり」の中の小単元「道具のうつりかわり」の学習に合わせて、11月から2月まで市内小学校3年生1クラスずつ(計48クラス)受け入れを行い、農機具、生活道具の実物見学とその農具や展示物を使っての講義(35分間ずつ2コマ)を行っている(写真2)。この見学でも、郷土文化指導員、学芸員、指導主事が学習指導要領に基づき、学習内容の検討と行い、役割を分担し、子どもたちの学習に生きる見学内容を工夫している。そのため夏休みには、小学校3年生の学習内容について、担任の教員対象向けの事前説明会を行い、学習内容の中に博物館見学を組み込む指導計画と学習方法の試案について紹介する。その中で協議を重ね、学校と資料館の役割分担を明確にした。現在は、小学校3年生の理解を深められるよう体験活動を少しずつ加え、常に内容の検討と改善を行っている。ここでも学校、博物館、郷土資料館が「ひと」「もの」「こと」で連携をし、子どもたちの価値ある学びの場となるように努力を続けている。



写真2 小3見学の様子

(3) 学校と博物館をつなぐシステムづくり

ア. 市内社会科教員自主研修会

刈谷市内では月に1回、刈谷市教育研究会社会科部の自主研修会(以下自主研)を開催している。社会科教員指導員が主催し、夕方から社会科の授業研究や情報交換などを行っている。令和3年度から7月の自主研のテーマを「歴史博物館の夏の企画展見学と博物館を使った社会科学習の展開について」で実施している。教員は学ぶ意識が高い。機会があれば学びたいと思っている。しかし、博物館の開館時間には仕事をしているため、足を運ぶことができない。そこで、夏休みの平日に夜間開館で自主研を開催することで、教員に博物館を知ってもらい、学習への利活用を促すのが狙いである。

令和3年度は、夏の企画展で「戦時下の刈谷」展を開催した。そこで、この企画展を生かして学芸員が企画展のギャラリートーク(写真3)と指導主事が「戦争中の刈谷の様子を授業化する」をテーマに『刈谷市史』や博



写真3 自主研でのギャラリートークの様子

物館収蔵品を紹介しながら、戦争中の刈谷の様子を紹介した。ギャラリートークと講話を30分ずつ設定し、プログラムの後、情報交換会を行い、学芸員が質問を受けたり、学校での活用方法を直接相談したりした。普段は学芸員も教員も話す機会がほとんどない中で、とても貴重な機会であり、熱心な教員から多くの質問を受けた。指導主事の講話では、各小学校の記念誌に掲載されている戦争に関する記述を拾い出しながら、実際の様子はどうだったのかを当時の方が書いた文章や写真などで紹介した。さらに、『刈谷市史』に掲載されている「刈谷市域の戦没者名簿」を使い、市域の戦没者がいつ、どこで亡くなったかをグラフ化し、視覚化することで学習教材として利用できるようにしたものを紹介した。

令和4年度は昨年度と違い、社会科部だけでなく、他教科の教員に門戸を開いたので、美術や国語が専門の教員、特別支援学校の教員も参加されていて、情報交換会では、自分の見識を深め、授業で生かしたいと熱心に質問をする教員や、博物館を授業で活用するための方法を発言する教員等、活発な意見交換がなされた。

博物館を利用したいと思っている教員は多いが、どのように利用したらいいかわからない。また、子どもたちには難しすぎるのではないかと躊躇する事も多い。自主研では、博物館の資料や博物館利用をどのように授業に役立てるか、それを主眼に学芸員、指導主事で内容を検討し、学芸員が資料選定、紹介内容の吟味を行う。当日の講話は、学習内容、学習環境を知る指導主事が授業を行う目線で話をする。中1見学と同様、ここでも役割分担を明確にし、つなぐシステムとして指導主事が入ることで相互の理解、理念の共有ができていていると思われる(資料3)。

資料3 自主研の先生方の感想(令和4年度)

- ・学芸員さんの話は面白く、へえ～って思いながら聞いています。話し方が上手。
- ・企画展について学芸員さんからお話を聞けることで大変勉強になった。個人で見学するだけでは質問しにくいことが気軽に聞けるのでよい。今後も企画展が入れ替わるたびに開催されたらうれしいと思った。
- ・水野勝成と信長・秀吉・家康との関わりを詳しく知ることができ、とても勉強になりました。刈谷にゆかりのある人物と有名な武将との関係を子どもに伝えることで、歴史により興味をもってもらえると思いました。
- ・とても有意義な会でした。授業で使えそうなネタがたくさんあり、6年生の担任になったらぜひ使わせていただきたいと思います。
- ・授業がより子どもにとって魅力的になるなと思いました。刈谷の歴史と日本全体の歴史を結びつけて考えるととても楽しそうで、学びが深まると思いました。学芸員さんから学んでいくこともこれから考えていきたいです。

イ. アウトリーチプログラム

令和4年度から立ち上げた新たなプログラムである。学芸員が授業に参加し、講話を行う生涯学習課主催の「出前講座」は以前から行われており、今年度も高校生向けの出前講座を実施している。

| 時間 | | 各グループ18人、Aグループ | 各グループ18人、Bグループ |
|-------|-------|------------------------------|------------------------------|
| AM | PM | | |
| 9:00 | 13:40 | オリエンテーション(5) あいさつ・荷物の整理 | |
| 9:05 | 13:45 | 講座室講義① | |
| 9:10 | 13:50 | 「博物館の役割と学芸員の仕事」(10) | |
| 9:15 | 13:55 | 遺物整理室 「土器の向こうに見えるもの」(20) | 講座室または体験学習室 遺物に触ってみよう(20) |
| 9:20 | 14:00 | | |
| 9:25 | 14:05 | | |
| 9:30 | 14:10 | | |
| 9:35 | 14:15 | 講座室または体験学習室 遺物に触ってみよう(20) | 遺物整理室 「土器の向こうに見えるもの」(20) |
| 9:40 | 14:20 | | |
| 9:45 | 14:25 | | |
| 9:50 | 14:30 | | |
| 9:55 | 14:35 | 移動・休憩 | |
| 10:00 | 14:40 | | |
| 10:05 | 14:45 | 講座室講義② | |
| 10:10 | 14:50 | 中学校要望講座(20) | |
| 10:15 | 14:55 | 質疑の時間を含める | |
| 10:20 | 15:00 | | |
| 10:25 | 15:05 | 展示室自由見学(15) | |
| 10:30 | 15:10 | | |
| 10:35 | 15:15 | 退館準備・あいさつ(5) エントランス | |
| 10:40 | 15:20 | | |
| 10:45 | 15:25 | 退館 | |

図1 令和4年度市内中1 見学、見学スケジュール



写真1 遺物に触れる体験の様子

文化指導員（退職教員）及び学芸員が縄文の遺物に触れる体験とバックヤード見学を行う（写真1）。その後、学芸員による学校の要望講座と展示室の見学を行うのが一連の流れである。現場の声を聴き、見学を有意義かつ円滑に行えるようにするため、見学の前に指導主事が各中学校を訪問し、打ち合わせを行った。その際、中学校の学習内容や学区の歴史的

なものなどを勘案して中学校の要望を聞き、学芸員の講義内容を決定した。また、今年度からは春の企画展示を見学できる学校については、企画展示担当学芸員による企画展示についての説明を行った。さらに、学校の中には、見学に合わせて社会科の単元を組み替えたり、学芸員への質問を準備したりすることもあるため、事前の打ち合わせを行うことで見学の内容を一部変更するなどの対応をした。学校の主体性を維持しつつも博物館のもつ機能を発揮できるよう取り組みを工夫している。

遺物に触れる体験とバックヤードの見学は、最高18人ずつと少人数で実施している。感染対策の一環ではあるが、人数を少なくしたことで、バックヤードでも生徒たちは土器復元など作業の様子を間近に見ることができるようになり、理解をより深めることができるようになった。遺物や土器に触れる体験をしながら埋蔵文化財の価値、歴史の面白さを学んで欲しいと指導主事、郷土文化指導員が学習内容を精査し、学芸員が効果的な資料（写真や実物）を準備し、主に指導主事と郷土文化指導員で生徒との対話を重視しながら授業形式の学習を行った。遺物に触れることでその重みや質感を感じ、実際にどうやって使っていたのだろうかという疑問を深めることができる生徒もいた。収蔵庫にも足を運び文化財保護の取り組みと博物館が抱える問題点（収蔵スペース不足）についても若干触れるようにした。このように、様々な見学メニューを実施することにより見学を終えた生徒からは以下のような感想を受けた（資料1）。

資料1 見学を終えた生徒の感想

- ・僕は今までなんとなく「博物館」という言葉を使っていましたが、今回の説明ですごく驚きました。「博物館」は来た人たちを物知りにしてくれる場所だったのです。考えてみれば、展示物の近くに細かく説明が書かれていることを思い出しました。展示物を保管するのが難しいことも知り、学芸員さん達はものすごく努力しているのだと感じました。
- ・『伊勢物語とかきつばた』（企画展示）の話では、平安時代に書かれた話にかきつばたが載っているの、どれだけ古い花なのかよく分かり、国の天然記念物というのも納得できました。今日教えていただいたことは、歴史や国語の古文につながり、特に伊勢物語は古文で読みやすいと教えてもらったので、読んでみたいと思います。
- ・当時の土器や石器に触ったのは初めてでしたが、重みや手触りなど写真で見ただけでは分からないことにも工夫が詰まっていたとても楽しく、貴重な体験でした。また、展示するにはたくさんさんの時間、人、お金が必要でそれでも頑張ってくれた人がいたから資料を見ることができて大切なものだという感じました。

感想から生徒たちは博物館見学の中で多様な学びをしていることが分かる。これは、見学をするにあたって館長、指導主事・郷土文化指導員、学芸員が対話を重ねた上で見学スケジュール、見学内容を決定したことが大きい。生徒たちは置いてある展示物を漠然と見て帰るのではなく、その背景にある「時間」や「人」や「お金」にも思いを寄せ見学を終えることができていることが読み取れる。

また、中学校の学習内容に関わる学習（遺物に触れる体験など）は指導主事や郷土文化指導員が学習を進め、博物館の概要や展示に関わることは学芸員が講義をするように役割分担を明確にした。こうすることで、見学内容にメリハリができ、生徒は集中して見学をすることができていたと思われる。

引率した教員からは次のような感想が寄せられた（資料2）。博学連携を進めるためには、今回の取り組みを多くの教員に知ってもらい、教員に博物館の価値に気づいてもらうことが大切である。こうした取り組みを積み重ねることで、この活動を学校と協働で改善していくことへの意識付けを多くの教員に広めていかなければならない。

資料2 引率教員の感想

- ・3年前にも引率していたが、そのときより詳しく説明していただいた。バックヤードなどを見る機会が少ないので、貴重な時間だった。
- ・バックヤードを見たり、本物に触れられたりしたことは生徒にとって宝物になったと思います。自由見学の時間が少し短く感じてしまったのは、子どもたちの意欲があったからかもしれません。
- ・説明してくださる先生や学芸員さんが変わっていたことで、生徒は新鮮な気持ちで話を聞くことができたと言っていました。テンポもよく、いい取り組みだと感じました。

あった。殻高が計測可能な個体では3～4cmのものが多く、5cmを超える個体はなかった。ウミニナ・ヘナタリ類は殻口部分の芯が残っている個体を数えたが、保存状況が悪いためにウミニナ類かヘナタリ類かの区別ができないものも多く見られたため、ウミニナ・ヘナタリ類としてまとめた。これらには少なくともウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・フトヘナタリが含まれている。

アサリはすべての資料が割れて殻頂部のみとなっていた。ウネナシトマヤガイの殻長の分布は0.6～2.2cmであった。オキシジミほとんどの個体が殻頂部しか残っていなかったが、カット4にはほぼ完形で殻高4.5cmの資料が1点見られた。マテガイ類も細かく割れて殻頂部のみとなっており、カット1でも殻頂部は出土していないが破片は見られた。アカニシはほとんどの個体が芯のみとなっており、殻口部分の芯が残っているものを数えた。いずれも小型の個体であり、殻高が計測可能な個体は1点のみ見られ6.3cmであった。ヤマトシジミは殻長2～3cmの個体が多いが、1～2cmのものも出土しており、全体に小さい。ハマグリ・オオノガイは殻頂部のみが出土した。シオフキはカット5出土の1点が殻長4.8cmであり、残り2点は殻頂部のみである。イボニシ類のうちカット3出土の1点は殻高3.8cmであった。

ハイガイが貝層の主体となりマガキの出土個体数も多い点は、同じ刈谷市内の縄文晩期に形成された中手山貝塚と共通している（新美2022）。また、本刈谷貝塚で出土した哺乳類などの動物骨の多くは火を受けた状態であったが（新美2021）、貝類にも明らかに焼けた資料が少量ではあるものの混じっていた。

引用文献

刈谷市2021『愛知県指定史跡 本刈谷貝塚確認調査報告書』

新美倫子2021「人骨・動物遺体」『愛知県指定史跡 本刈谷貝塚確認調査報告書』刈谷市、169-177、258-260頁

新美倫子2022「動物遺体」『中手山貝塚発掘調査報告書』刈谷市、94-97頁

【報告】

価値ある学びの場となる博学連携のあり方について

河村智美

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大により、博物館見学等、校外へ出る学習は中止になり、外部講師を招聘する学習もその多くは延期や中止を余儀なくされた。ウィズコロナ、アフターコロナを見据え、新たな博学連携のあり方を模索し、価値ある学びとなる努力を続けていく必要がある。本稿では、昨年度、今年度の取り組みを振り返りながら当館が実施する博学連携事業の報告をする。

2 博学連携事業を行うにあたって

令和2年度から実施されている新しい小学校学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が強調され、子どもたちが未来を切り開く資質・能力を社会と共有し、連携して育てていくことが重視されている。このような中、博物館等の社会教育施設が学びの場としてどのように活用できるかの期待は高まっている。小・中学校の学習指導要領では、博物館との連携について明文化もされている。

今、求められている博学連携のあり方について、国立科学博物館連携推進・学習センター長の小川義和は著書の中で「使命、教育システムが異なる機関における連携では、相互の理解、つなぐシステム、理念の共有が重要です」⁽¹⁾と述べている。当館では、現職の教員である指導主事が配置されている。小川が指摘するつなぐシステムとして博物館指導主事が活動していくことで、博物館と学校現場の相互の理解が進み、理解が進んでいくことで理念を共有し、協働することができると考える。

以下、実施した博学連携事業のうち、市内中学校1年生博物館見学、市内小学校3年生郷土資料館見学、市内社会科教員自主研修会、アウトリーチプログラムについて紹介する。

3 博学連携事業の実際

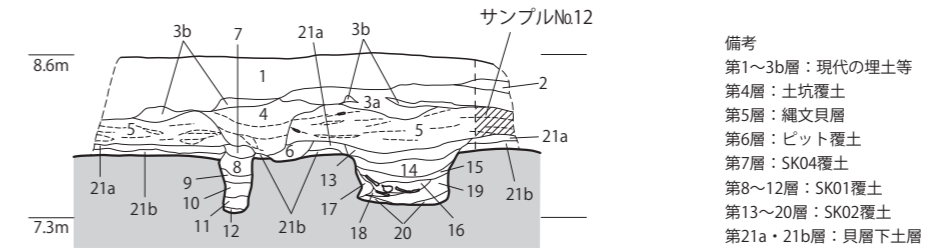
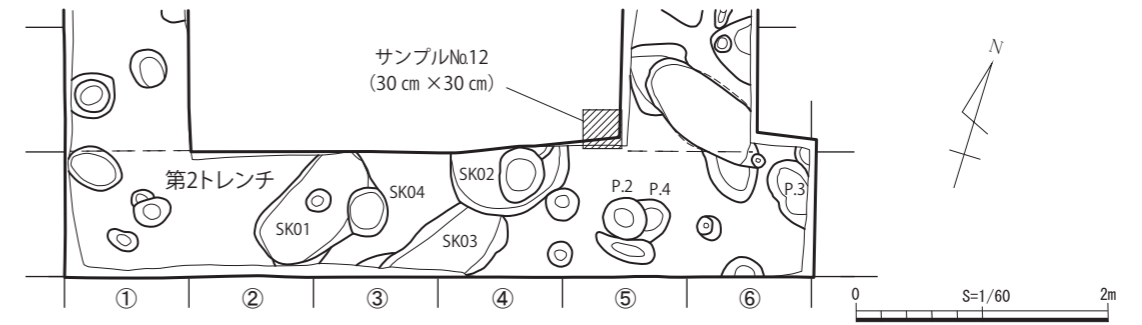
(1) 市内中学校1年生博物館見学

当館は開館以来、市内中学校1年生博物館見学（以下市内中1見学）を実施している。新型コロナウイルス感染拡大前は一度に70人（2クラス）の生徒を受け入れ、見学を行っていたが、感染拡大後は、1クラス（最大35人）ずつを受け入れ、さらに2グループに分け（最大18人）見学を行っている。当館が各校に1クラスに各1台バスを用意し（計41クラス）、配車している。小学校で歴史を一通り学習して中学へ入学してきた1年生の早い段階でさらに歴史に興味をもち、中学校の歴史学習に生かしてもらうために中学校1年生の5月から7月の間に設定している。

内容は、図1の通りである。館長による全体講義の後、2グループに分かれて、指導主事と郷土

第1表 本刈谷貝塚（2001～2003年調査） 貝層・土壌サンプル一覧表

| サンプルNo | 調査年度 | 調査区 | 遺構 | 層位 | 採取日 | 乾燥重量(kg) | 備考 |
|--------|------|------------|------|----------------------|------------|-----------|----------------|
| 1 | 2001 | TP4 | | 混土貝層（7層上半） | 2001. 4.26 | 17.70 | 40cm×40cm×15cm |
| | | | | 混土貝層（7層下半） | 2001. 4.26 | 28.80 | 40cm×40cm×15cm |
| | | | | 貝層下土層（8層） | 2001. 4.27 | 8.70 | 40cm×40cm×5cm |
| 2 | 2001 | TP9 | | 混貝土層（5層） | 2001. 4.20 | 35.50 | TP内の5層全て |
| 3 | | | | TP11 | | 貝層上土層（2層） | 2001. 5. 3 |
| 4 | 2002 | 4区-1② | SK01 | 混貝土層（3層） | 2002.11. 6 | 13.90 | 遺構埋土 |
| | | | | 5 | 4区-1⑤ | | 混貝土層（東壁2層） |
| 6 | 2002 | 4区-2② | | 混貝土層（北壁6層上半） | 2002.11.14 | 54.60 | 50cm×50cm×10cm |
| | | | | 混貝土層（北壁6層下半） | 2002.11.14 | 37.90 | 50cm×50cm×10cm |
| | | | | 貝層下土層（北壁16層） | 2002.11.14 | 18.70 | 50cm×50cm×10cm |
| 7 | 2002 | 4区-3② | | 混貝土層（東壁6層） 0～10cm | 2002.11.19 | 51.70 | 50cm×50cm×10cm |
| | | | | 混貝土層（東壁6層） 10～20cm | 2002.11.19 | 38.10 | 50cm×50cm×10cm |
| 8 | 2002 | 6区-1① | | 混貝土層（北東壁36層） 0～10cm | 2002.12.10 | 51.00 | 50cm×50cm×10cm |
| | | | | 混貝土層（北東壁36層） 10～20cm | 2002.12.10 | 46.80 | 50cm×50cm×10cm |
| | | | | 貝層下土層（北東壁39層） | 2002.12.10 | 12.90 | 50cm×50cm×10cm |
| 9 | 2002 | 6区-1⑥ | SD01 | 混貝土層（北東壁28層） | 2002.11. 5 | 62.40 | 遺構埋土 |
| 10 | 2002 | 6区-1⑦ | SK01 | 土坑内貝層（上部） | 2002.11. 7 | 4.50 | 遺構埋土 |
| | | | | 土坑内貝層（中部） | 2002.11. 7 | 17.60 | 遺構埋土 |
| | | | | 土坑内貝層（下部） | 2002.11. 7 | 14.90 | 遺構埋土 |
| 11 | 2003 | 調査区A A-2g③ | | 混土貝層（東壁10層） 0～5cm | 2003. 5. 2 | 19.30 | 50cm×50cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（東壁10層） 5～10cm | 2003. 5. 2 | 24.40 | 50cm×50cm×5cm |
| 12 | 2003 | 第2トレンチ⑤ | | 混土貝層（北壁5層）① 0～5cm | 2003. 6. 7 | 8.80 | 30cm×30cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（北壁5層）② 5～10cm | 2003. 6. 7 | 4.70 | 30cm×30cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（北壁5層）③ 10～15cm | 2003. 6. 7 | 12.30 | 30cm×30cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（北壁5層）④ 15～20cm | 2003. 6. 7 | - | 30cm×30cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（北壁5層）⑤ 20～25cm | 2003. 6. 7 | 6.90 | 30cm×30cm×5cm |
| 13 | 2003 | 第2トレンチ | SK01 | 8層 | 2003. 6. 6 | - | 遺構埋土 |
| | | | | 9層 | 2003. 6. 6 | - | 遺構埋土 |
| | | | | 10層 | 2003. 6. 6 | - | 遺構埋土 |
| 14 | 2003 | 第2トレンチ | SK04 | 3層 | 2003. 5.22 | - | 埋設土器内埋土 |
| | | | | 4層 | 2003. 5.22 | - | 埋設土器内埋土 |
| | | | | 5層 | 2003. 5.23 | - | 埋設土器内埋土 |
| 15 | 2003 | 第4トレンチ③ | | 混土貝層（西壁16層） 0～5cm | 2003. 5.13 | 23.20 | 50cm×50cm×5cm |
| | | | | 混土貝層（西壁16層） 5～10cm | 2003. 5.13 | 22.60 | 50cm×50cm×5cm |
| 16 | 2003 | 第4トレンチ⑥ | | 混土貝層（西壁16層） | 2003. 5.21 | 2.30 | ハマグリ・シオフキ集中 |
| 17 | 2003 | 第4トレンチ拡張部A | SK06 | 3層 | 2003. 5.30 | 23.40 | 埋土直下 上部貝層 |
| | | | | 4層 | 2003. 5.30 | 10.70 | 上部貝層下 人骨周辺 |
| | | | | 4層 | 2003. 5.30 | 8.90 | 上部貝層下 暗褐色土 |
| | | | | 5層 | 2003. 5.30 | 13.90 | 貝層 |
| | | | | 6層 | 2003. 5.30 | 6.30 | |
| | | | | 7層 | 2003. 6. 2 | 10.20 | 4層下 暗褐色土 人骨周辺 |
| | | | | 4層 | 2003. 6. 3 | 2.80 | |
| 18 | 2003 | 第5トレンチ⑤ | | 混土貝層（西壁4層） | 2003. 5.16 | 5.00 | ハマグリ・オキシジミ集中 |
| 19 | 2003 | 第6トレンチ④ | | 混土貝層（北壁8層） | 2003. 5.27 | 3.70 | ハマグリ・オキシジミ集中 |
| 20 | 2003 | 第9トレンチ | SK01 | 1層 | 2003. 4.14 | 6.40 | 遺構埋土 |
| | | | | 2層 | 2003. 4.14 | 14.10 | 遺構埋土 |
| | | | | 3層 | 2003. 4.14 | 13.20 | 遺構埋土 |
| | | | | 4層 | 2003. 4.14 | 13.80 | 遺構埋土 |



第1図 サンプルNo.12 採取場所（2003年調査 第2トレンチ⑤ 北壁5層）

備考
 第1～3b層：現代の埋土等
 第4層：土坑覆土
 第5層：縄文貝層
 第6層：ピット覆土
 第7層：SK04覆土
 第8～12層：SK01覆土
 第13～20層：SK02覆土
 第21a・21b層：貝層下土層

第2表 出土貝類種名

| | | | | | |
|---|--------|----|-----------|----|-------|
| 1 | カサガイ類 | 9 | ツメタガイ類 | 17 | ハマグリ |
| 2 | タマキビ類 | 10 | アカニシ | 18 | オキシジミ |
| 3 | ウミニナ | 11 | イボニシ類 | 19 | アサリ |
| 4 | イボウミニナ | 12 | ムシロガイ類 | 20 | シオフキ |
| 5 | ウミニナ類 | 13 | ハイガイ | 21 | マテガイ類 |
| 6 | ヘナタリ | 14 | マガキ | 22 | オオノガイ |
| 7 | フトヘナタリ | 15 | ヤマトシジミ | | |
| 8 | ヘナタリ類 | 16 | ウネナシトマヤガイ | | |

第3表 貝類出土内容

| カット | ハイガイ | | マガキ | ウミニナ・ヘナタリ類 | アサリ | | ウネナシトマヤガイ | | オキシジミ | | マテガイ類 | | ムシロガイ類 | アカニシ | ヤマトシジミ | ハマグリ | | オオノガイ | その他 | 計 |
|------|--------|--------|-------|------------|-----|-------|-----------|----|-------|----|-------|----|--------|------|--------|------|---|------------------|---|------|
| | 左 | 右 | | | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | | | | 左 | 右 | | | |
| カット1 | 70 | 60、焼1 | 8、焼3 | 2 | 7 | 10 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 不明巻貝芯1 | 172 | |
| カット2 | 107、焼2 | 85、焼1 | 28 | 20 | 4 | 10 | 1 | 2 | 2 | 2 | 3 | 6 | | | 1 | 2 | | イボニシ類1、不明巻貝芯9、蓋1 | 287 | |
| カット3 | 301、焼1 | 238、焼4 | 80、焼3 | 29 | 12 | 12、焼1 | 15 | 8 | 8 | 7 | 9 | 3 | 3 | 2 | 6 | 2 | 2 | 1 | シオフキ右1、タマキビ類1、幼2、イボニシ類1、ツメタガイ類1、幼焼1、不明巻貝芯10、蓋1、幼1 | 766 |
| カット4 | 172 | 165 | 52、焼1 | 19、焼1 | 6 | 5 | 1 | 3 | 4、焼1 | 2 | 1 | 2 | 6 | 5 | 7 | 2 | 1 | 1 | カサガイ類1、不明巻貝芯9 | 466 |
| カット5 | 43 | 39、焼1 | 19 | 7、焼2 | 3 | 6 | 5 | 3 | | | | 2 | 焼2 | | 2 | 2 | 3 | | シオフキ右2、不明巻貝芯2、幼2 | 145 |
| 計 | 696 | 594 | 194 | 80 | 32 | 44 | 22 | 17 | 16 | 14 | 13 | 13 | 12 | 8 | 16 | 7 | 7 | 4 | 47 | 1836 |

註 二枚貝は殻頂部を、巻貝は芯を数えた。左：左殻、右：右殻。幼：幼貝、焼：焼けた資料。マガキは左殻の点数を示した。ヤマトシジミは左殻・右殻の合計を示したので、最小個体数はその1/2となる。

[報告]

本刈谷貝塚出土の貝類

新 美 倫 子
鵜 飼 堅 証

本刈谷貝塚の2001～2003年調査についてはすでに2021年に報告書が刊行され、出土資料の内容も報告されている（刈谷市2021）。しかし、動物遺体に関しては分析が間に合わず、出土種名とその概要を報告することしかできなかった（新美2021）。そこで、ここでは出土貝類の内容について、ブロックサンプルの内容をもとにより詳しい報告を行いたい。

1 ブロックサンプルについて

貝類や魚類の出土内容を定量的に評価するための、あるいは小型遺物の採集もれを評価するための貝層・土層ブロックサンプルは、2001～2003年調査範囲中の20ヶ所で採集された（第1表）。これらには同一地点（採集区）で上から順に柱状に採集されたものや、遺構埋土から層位ごとに任意の量を採集したものなどがある。

当遺跡は、縄文時代に貝塚が形成されると共に人骨が何度も埋葬されており、その後も継続して使用されたので、貝層は全体にかなり攪乱されていた。そのため、貝類の出土内容を把握するには、できるだけ攪乱の少ないサンプルを採用する必要がある。そこで、第1表の20個のサンプルの中でも最も貝層の保存状態がよく、かつ側面から堆積状況を確認しながら柱状に貝層を採集することができたサンプルNo.12（太線で囲んだ部分）を選び、ここではその貝類出土内容を報告する。

2 貝類の出土内容（第2・3表）

サンプルNo.12は第1図に示した30cm×30cmの採集区で、上から約5cmずつ貝層（混土貝層）を土ごと採集し、採集された貝層は上から順にカット1・カット2・・・とした。カット1～3とカット5は1mm目の篩で、カット4は2mm目の篩で水洗選別を行っている。出土した貝類の種名を第2表に、出土内容を第3表に示した。

貝類はカット1～5の合計で1836点出土した。種ごとの最小個体数ではハイガイが696個体で最も多く、次に多いのはマガキ194個体で、ウミニナ・ヘナタリ類が80個体、アサリ44個体、ウネナシトマヤガイ22個体、オキシジミ16個体、マテガイ類13個体、ムシロガイ類12個体、アカニシ・ヤマトシジミが各8個体、ハマグリ7個体、オオノガイ4個体と続く。他には、シオフキ3個体、タマキビ類3個体、イボニシ類2個体、ツメタガイ類2個体、カサガイ類1個体が見られた。ウミニナ・ヘナタリ類やムシロガイ類は、食料としては利用されなかったであろう。

ハイガイはどのカットでも出土数が最も多かった。すべてのカットにおいて殻長2～3cmの個体が最も多く、ついで殻長3～4cmの個体が多く見られた。殻長が2cm未満と4cm以上の個体は少量であった。マガキは大部分が割れて殻頂部のみとなっていたが、いずれもごく小さな個体で

執筆者紹介

村瀬 典章 刈谷市歴史博物館元学芸員

野村 啓輔 刈谷市歴史博物館学芸員

川添 和暁 愛知県埋蔵文化財センター調査研究専門員

河野 あすか 刈谷市歴史博物館学芸員

河村 智美 刈谷市歴史博物館指導主事

新美 倫子 名古屋大学博物館准教授

鵜飼 堅証 刈谷市歴史博物館専門員

刈谷市歴史博物館 研究紀要 第3号

令和4年度

令和5年3月31日発行

編集・発行 刈谷市歴史博物館

〒448-0838

愛知県刈谷市逢妻町4丁目25番地1

印刷 株式会社ニホンディスプレイ